

# 伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一三年 第六九号

伊能忠敬研究会



THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.69 2013

# 伊能大図146号高松附近と

## 伊能大図151号部分丸亀付近

(アメリカ議会図書館蔵模写図に彩色)

表紙図は伊能大図151号の丸亀付近と  
146号高松付近で、宇多津から阿波国境  
までが、ほぼ高松藩領である。

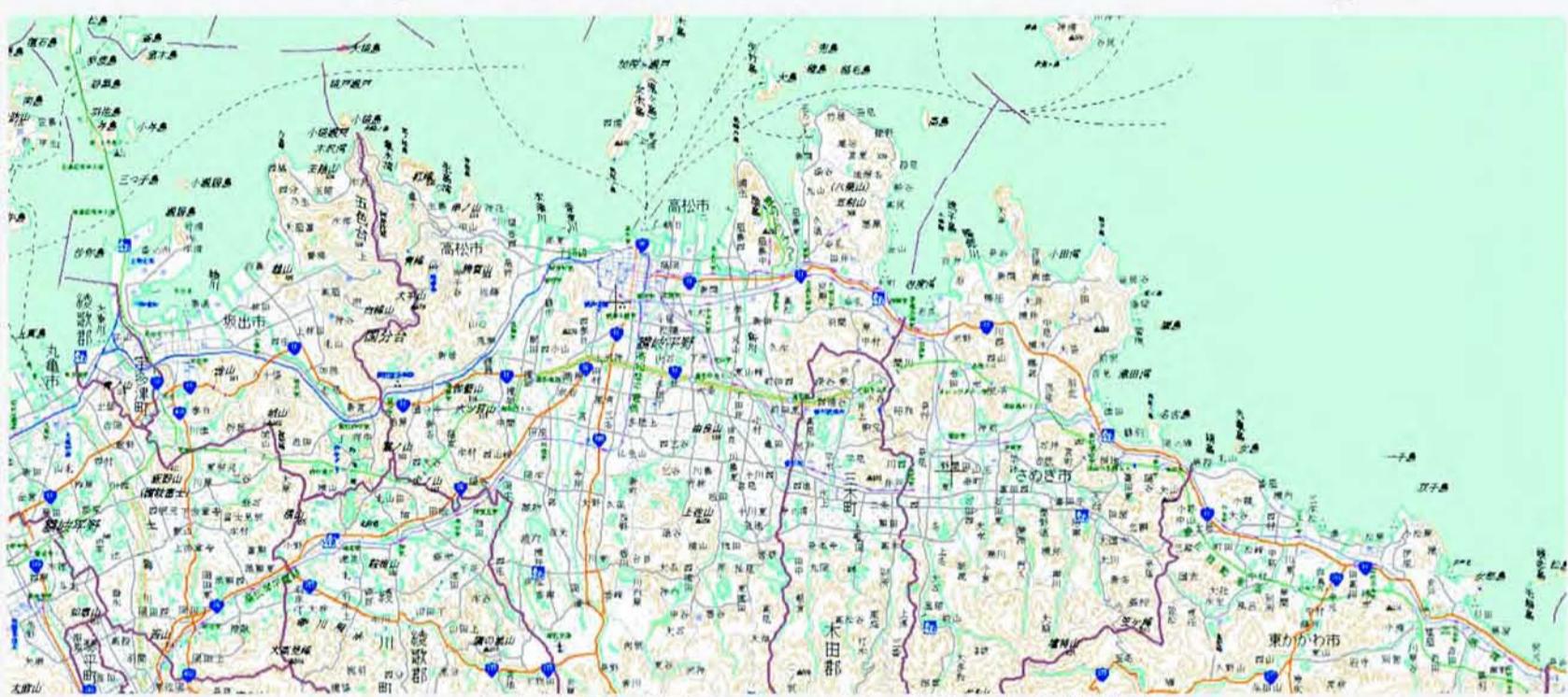
本図は、アメリカ議会図書館蔵の無着色  
の大図模写図の水面に水色、山岳部には  
黒線で描かれた稜線に沿って、国会図書  
館蔵の模写図と同様な彩色を施した復元  
図である。

高松城は近世の海城としては、最初で  
最大の例で「讃州さぬきは高松さまの、  
城が見えます波の上」と謡われたという  
が、城全体が海中に突出した様子が、伊  
能図でもはつきり描かれている。

現在では、すっかり市街の中になつて  
しまったが、三重櫓や門など一部の建物  
と一部の石垣、堀が残つており「玉藻公  
園」として整備されている。外堀と内堀  
には海水が引き込まれており、往時の名  
残を残して、堀には牡蠣などの貝類が生  
息し、養殖の鯛も放流されているといふ。  
讃岐には10万石の高松藩と5万石の丸亀藩、  
その支藩で1万石の多度津藩が置かれた。

高松藩は水戸徳川家の支藩で溜間詰と  
いう高い家格を持つていたが、測量日記を  
読むと物凄く丁寧に伊能隊に接している。

渡辺一郎 (表紙題字は伊能忠敬の筆跡)



## 目次

### グラビア

#### ● 伊能図の旅

大図一〇九号より 野麦峠  
大図二五号より 襟裳岬  
大図一一六号より 三河湾東部

### 話題

#### 史料解説

桜井秀藏あて伊能忠敬書簡

伊能測量現地史料紹介⑪

高松藩久米栄左衛門 伊能測量覧

文化五年測量方一件記録 伊藤栄子・渡辺一郎

窪谷婦人妙真のこと

コラム 仙台藩蔵屋敷と潮来の繁栄

伊能忠敬周辺の女性の手紙

コラム 小島一仁先生古文書講座の資料から

伊能忠敬と飲酒

コラム 加藤時男

伊能楯雄

6

星埜由尚

1

### 忠敬談話室

#### 山武歳時記(二)

一九十九里田中荒生で復活した「虫送り」

江口俊子

29

#### 伊能測量漫筆三

唐津藩の伊能図に関するメモ

渡辺一郎

30

安倍首相成長戦略の記者会見で伊能忠敬に触れる

伊藤栄子

31

#### コラム

あれ? 弯架羅針がない?

伊藤栄子

25

#### 異色の新会員紹介

箱田良助の子孫・榎本隆充さん

渡辺一郎

32

#### 榎本武揚文書に出会う

伊藤栄子

33

#### 会報六八号の「先触れ」の写しに誤記を発見より

渡辺一郎

34

#### コラム 「伊能図大全」の刊行決定

伊藤栄子

35

### ニュース・お知らせ

各地のニュース・新入会員紹介・会員便りほか

表紙解説 渡辺一郎 (表紙裏)

編集部

45

資料 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第六回  
伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版  
渡辺一郎監修・井上辰男編著

編集部

36

# 伊能図の旅

伊能大図第109号より

# 野麦峠

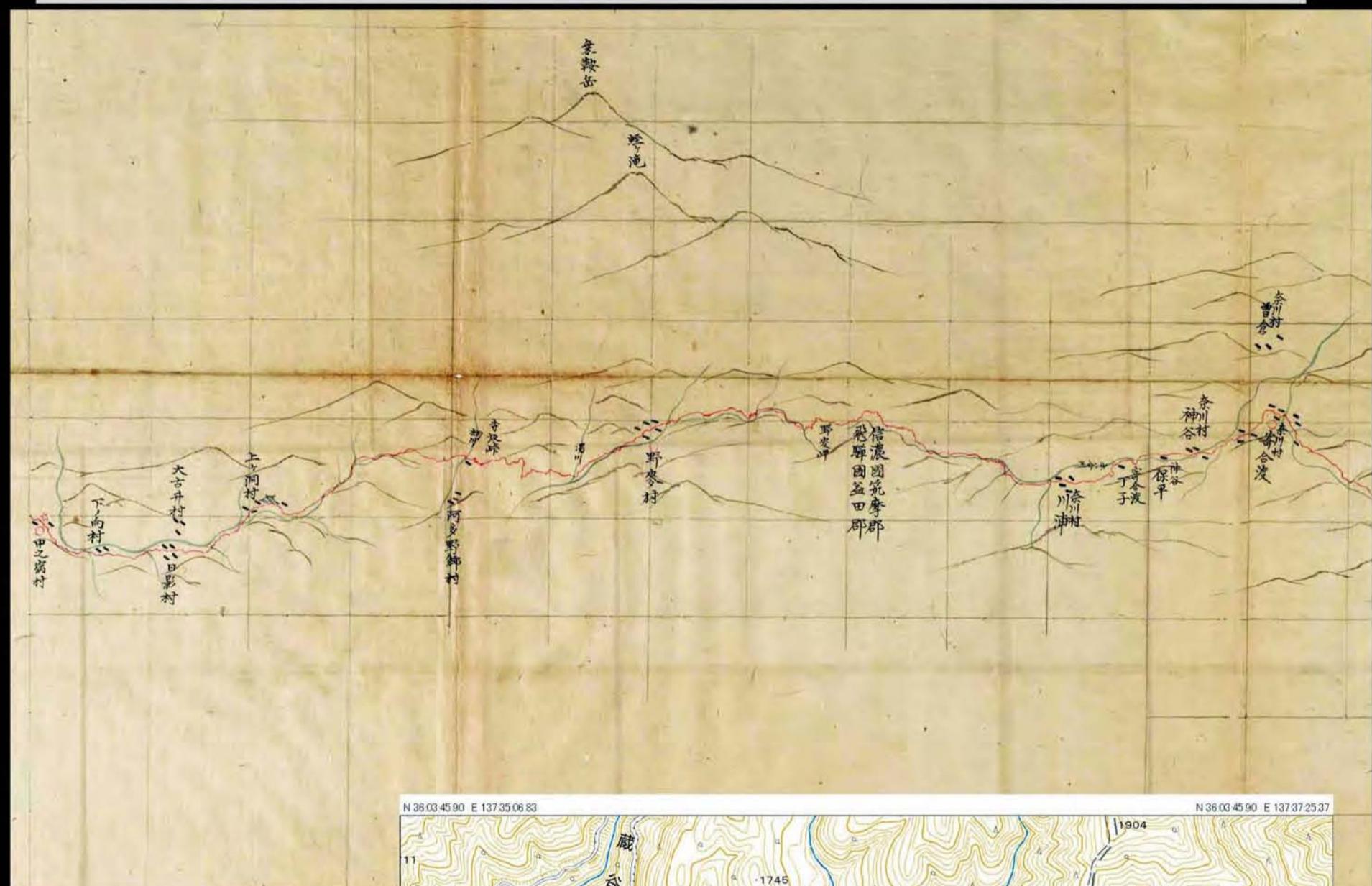
第八次測量の日記を読むと、川を渡る橋についてその種類、長さなどについて詳しく記載されている。このことから判断して、蛭ヶ谷沢以外橋はなかつたのであろう。大図に描かれた野麦街道に沿う川は、もともと大図作成時に誤つて描かれたか、陸軍が模写したときに誤ったか、いずれにしても野麦街道の遙か下を流れていたものを誤つて描いたと考えられる。陸軍模写の大図には青線でもつて河川が描かれているが、山景の模写も含めてその正確さには疑問がある。

女工哀史で有名な野麦峠は、飛驒から信濃に抜ける街道が通つてゐる。峠の標高は、一六七二・五mで日本一高い水準点が置かれている。伊能測量隊は、第八次測量においてこの峠を越えた。伊能測量においても最高地点となつていい。現在も岐阜県と長野県の県境となつてゐる。現在の県境は峠の分水界となつていい。野麦峠は、飛驒と信濃の国境であり、現在も野麦峠は、飛驒と信濃の国境であり、少し下つたところではあると記し、大図上でも飛驒国益田郡と信濃国筑摩郡の境は野麦峠に東に注記されている。

地形図を見ると、野麦峠を越える自動車道と別に水準点が置かれていた徒步道がある。この水準点は、明治三六年に設置されたもので、この道は、旧野麦街道と言われている。伊能測量當時、野麦街道の位置が明治三六年当時と同じであつたか明らかではないが、大きくなつて変わらないであろう。おそらく伊能測量隊は、現在地形図に見られる徒步道を測量して行つたものと考えられる。

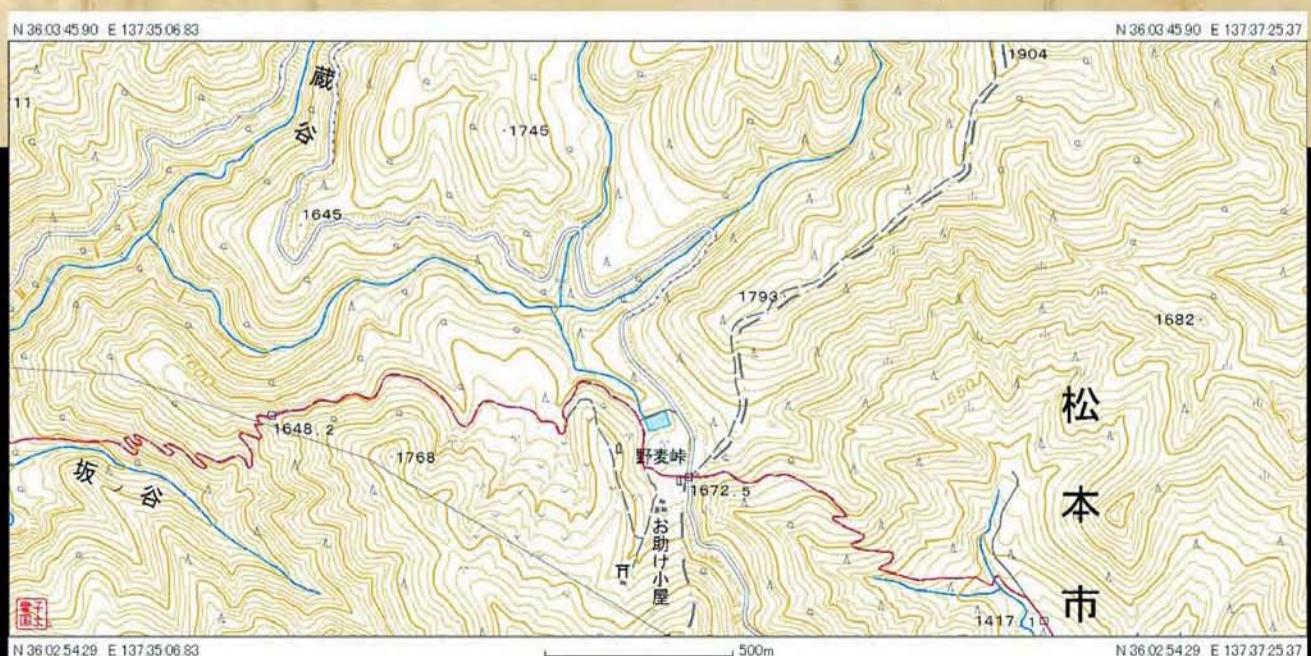
大図を見ると、野麦村から野麦峠まで測線に沿つて川が描かれ、数回にわかつて測線が渡つてゐる。測量日記によると野麦村から蛭ヶ谷沢の長さ九間の板橋といふ。往時の野麦街道は、谷に沿つた道ではなく、谷壁斜面の上部を横切つていく道である。谷壁斜面を刻む沢はあるが小

野麦峠



伊能大図第109号野麦峠の部分  
(アメリカ議会図書館)

右図：国土地理院電子国土  
野麦峠への測線重ね図  
東京カートグラフィック（株）  
猪原絢太氏による  
赤点線が測線



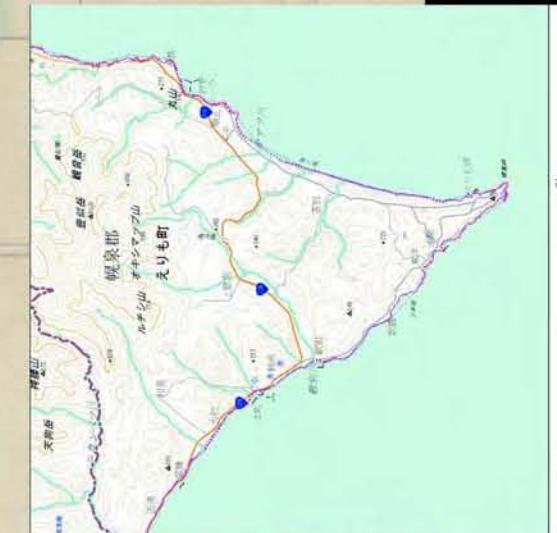
# 襟裳岬



伊能大図第25号襟裳岬の部分（アメリカ議会図書館）  
上図は松前距蝦夷行程測量分図（国立公文書館）  
右図は国土地理院電子国土襟裳岬への測線重ね図、青点線が測線  
(東京カートグラフィック株式会社猪原経太氏による)

**襟裳岬** 寛政二年の第一次測量において、蝦夷地の南半の海岸を測量したが、いくつかの区間で海岸線を測量できなかつた。そのひとつが襟裳岬である。測量日記によれば、伊能測量隊は、ホロイツミ（幌泉、現在のえりも町中心市街地）から山越えし、サルル（猿留）に抜けている。日高から十勝への海岸は、名だたる難所として有名で、急峻な海蝕崖が迫り、当時の測量隊の陣容では、海岸線の測量は難しかつたのであろう。十勝側の国道は、その整備に直轄化後に開削された猿留山道を通つた。第一次測量後に作成された蝦夷図（国立公文書館所蔵）には、この測線が描かれている。さ府金に黄金を駆使するくらいの経費がかかつた道路、といふ意味で黄金道路といふ。伊能測量隊は、東蝦夷地の幕府所蔵の大図を見ると、測線は海岸線を描いており、襟裳岬を廻つていて。一方、猿留山道を通過した第一次測量の成果は全く描かれていない。測量日記によれば、寛政二年七月二日シャマニ（様似）を出発した伊能測量隊は、アイヌの案内人をつけて険阻な海岸線を測量し、ようやくのことでホロイツミに到着した。この時は、日が暮れ、ホロイツミからの迎えの提灯の明かりを見たときには、「地獄に仏」とはこのことだと書いてある。地形図を見ると、この間は、海蝕崖が迫り、測量日記の記載も実感を持つて理解することができる。

ホロイツミからは、半里ほど海岸を進み、山側へ折れて襟裳岬の半島を横断した。東海岸のサルルに止宿し、さらにビロウ（広尾）まで新開山道を測量している。国立公文書館所蔵の第一次測量の成果蝦夷図には、この新開山道を測量した測線が描かれておらず、アーモンド・リード・マッケンゼー（アーモンド）が1850年に最大限沿った測線が描かれており、両者の図では、海岸線でも海岸線が全く異なることは明らかである。兩者の図では、描かれている測線が全く異なることは明らかである。このように、襟裳岬周辺における最終成果の測線は、第一次測量の成果は使用されていないと見るべきである。



伊能大図第116号より

# 三河湾東部

三河湾

豊橋を中心とした三河湾奥の地域は、トヨタ自動車をはじめとする大工場が立地する埋め立て地が広がっている。このような人工の海岸線からは想像できない大きな砂州が伊能大図には描かれている。水の中州と書かれた砂嘴が牟呂村の辺りから西南西の方向に細長く延び、波瀬村の沖まで達して、城下町・田原が面する湾（現在の田原湾）を形作っている。湾のなかには、波瀬村から突出する二つの砂嘴が描かれ、湾内には大きな砂州が描かれている。この海岸線は、第四次測量において測られている。伊能測量隊は、享和二年四月七日田原城下に入り、十日に田原城下出立、牟呂村に止宿して十一日に吉田城下（現在の豊橋）に到着し、十四日に吉田城下を出立して三河湾の海岸を測進している。この間の測量日記には、水中州ほかの砂州についての記載は全くない。また、波瀬村から突出する砂嘴は、先端まで測線が行き届いており、このような形態の砂州ではあつたことは明確である。しかし、水中州と湾内の砂州については、その輪郭が描かれていて、このように砂州ではあるが、現州が存在したことは間違いない。現州在これら砂嘴・砂州を実見することはできず、埋め立て等により地形は大きく変わつておらず、工場敷地となつてゐるところは往時の姿を想像することもできない。ただ、地形図を見ると、牟呂村の砂嘴は、伊能図には実見したものしか描かれていないという原則から見ると、少なくともその輪郭が描かれた砂嘴及び砂嘴根の部分と考えられる干拓地（この干拓地は、明治時代の地形図では水田となつていており、現在も水田地帯である。）には、牟呂から水中州の方向に高まりのあることが等高線から読み取ることができる。



伊能大図116号三河湾の部分（アメリカ議会図書館）  
下左：国土地理院電子国土三河湾東部への測線重ね図  
東京カートグラフィック（株）猪原紘太氏による  
赤点線が測線  
下右：三河湾東部明治23年測図2万分の1地形図



## 桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡

伊能樺雄

私の手元に大谷亮吉の「伊能忠敬」がある。この本は祖父の甲之助が、大正五年に日本学士院から贈呈されたもので、送り状には「伊能忠敬翁測地事蹟の調査につき兼ねて多大の便宜を與へられし候段深謝の至り」とある（図1）。

そして、その五年前の明治四四年五月に発行された「偉人伊能忠敬」（大谷亮吉、海塩錦衛監修・加瀬宗太郎記述）の序文（図2）には、次のように書かれており、地元佐原での大谷の調査の様子が窺い知れる。

（明治）四一年の夏、東京より帝国学士院嘱託員大谷理学士佐原町に出張せられ、親しく伊能先生の事蹟を調査せられるに及び同家の秘蔵に係る先生の遺物は挙げて閲覧考証されたる而已ならず、進而当時伊能家に關係ありたる緒家を歴訪して遺物の搜索は勿論普く事蹟を渉獵調査したる…

私の家（伊能七郎右衛門）は、忠敬の家（伊能



図2 大谷・梅塩監修「偉人伊能忠敬」序文

三郎右衛門家）の分家であり、祖父甲之助の四代前が大谷の「伊能忠敬」文中に出てくる伊能豊秋であることから、我が家のへの大谷の来訪は十分考えうることである。

まず、文中にたびたび引用される「豊秋日記」は、忠敬婿入前後の様子を知るうえで、当時の関係資料が数少ない中、十分調査に役立てられたことと思う。

また、文中に「七郎右衛門方口碑」と補筆された部分がある。

例え、「伝うる處によれば忠敬は嘗て医たらんと欲し其術を修めたることあり。その伊能家に入る頃は常陸・土浦辺に於いて修学し居りたりと。」

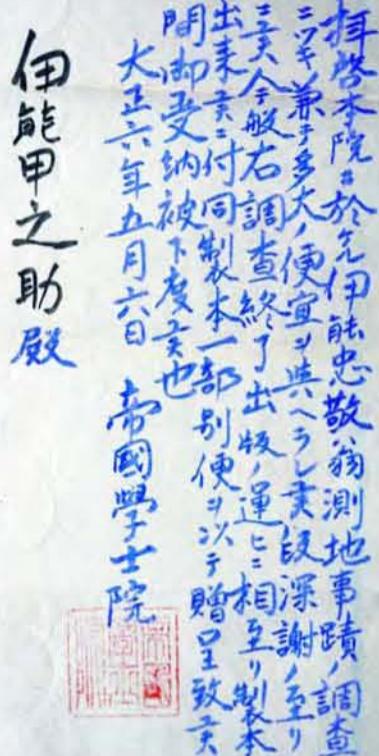


図1 帝国学士院の礼状

白叙

明治三十八年中佐原中學校校友會は學報第八號附錄として伊能忠敬先生と云へる一小冊子を編したり當時編者は専ら其記述に任せしか價値ある材料を得る方法に乏しかりしを以て僅に贈位前に發表せられたる書類を基礎とし多少傳説の探るべきものを参考してこれを排列したるに過ぎざりき

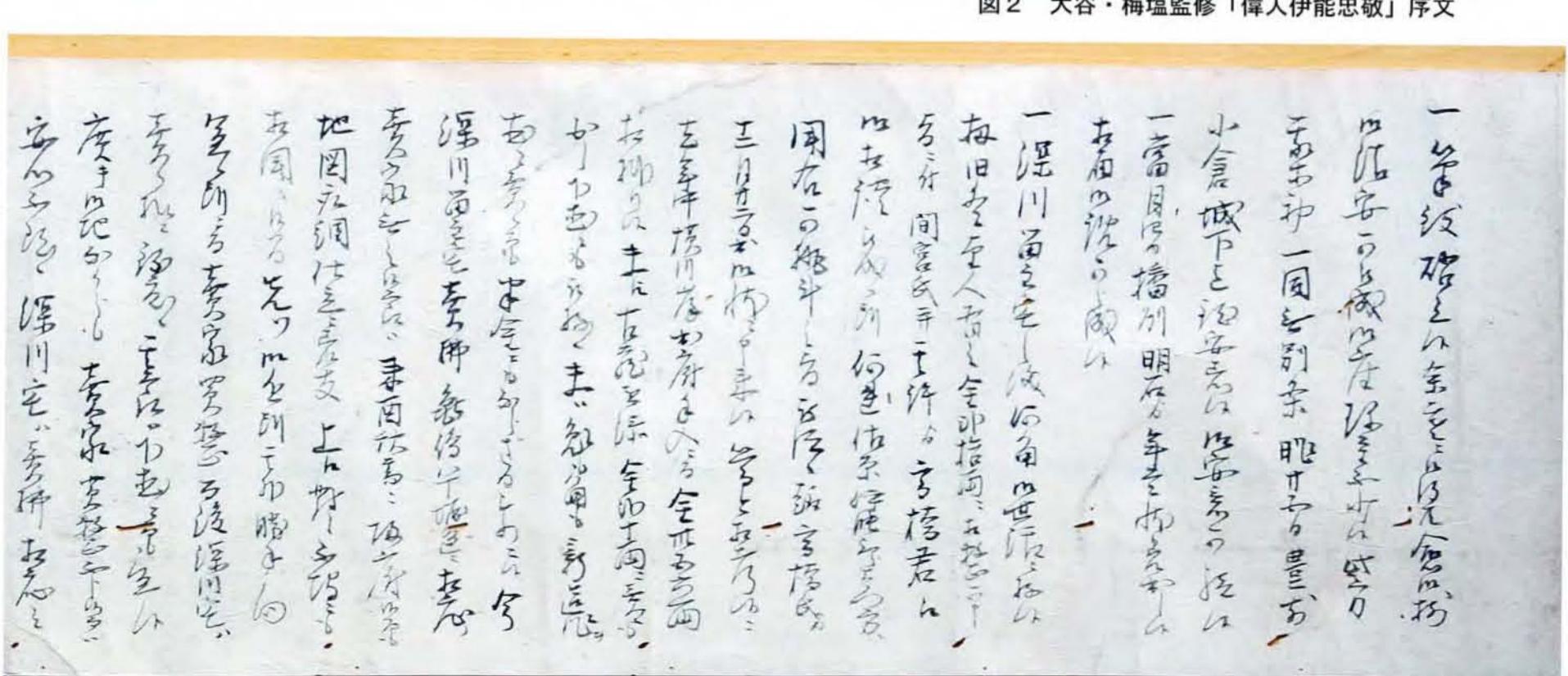
越て四十一年の夏東京より帝國學士院嘱託員大谷理學士佐原町に出張せられ親しく伊能先生の事蹟を調査せらるゝに及び同家の秘蔵に係る先生の遺物は學術研究せられたる而已ならず進而當時伊能家にて閲覧考証せられたる而已ならず

伊能先生の事蹟を調査せられたる所以なり聊か頗

關係ありたる諸家を歴訪して遺物の搜索は勿論普く事蹟を渉獵調査したるの結果先生の系譜年歴調地製國の方法等悉く斯れを審にするを得たり此間海鹽佐原中學校長も亦同院の嘱託を受け蒐集に盡し踏査に力めたり之れ蓋し佐原町は此一大偉人か登途の地たるに拘らず是れか事蹟の記録絶無なるを慨歎せらるゝこと久しうしか故なり乃ち茲に多年の宿望を果すと共に余を督して曩に發行せる小冊子を改刪せしめらる是れ此の冊子の成就を見たる所以なり聊か頗末を記して以て自ら叙とす

明治四拾四年一月

編者識す

図4 桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡  
(文化9年1月26日付け)

これらは、祖父と大谷との対話の中から出てきたものなのである。

さて、桜井秀藏あて忠敬書簡に關しては、大谷本中に次の記述がある（図3）。

「是より先深川黒江町の住宅狭隘にして地圖作成上不便を感じること尠ながらざるを以て、文化七年の末、高橋景保の盡力により暦局内に邸宅を新築するの議略成しも遂に実現するに至らず。九州地方へ第二次の出張中桜井秀藏及其他二三の者に邸宅の選定を依頼したるも又意に満つるものを得ざりき。（文化九年春忠敬より桜井秀藏に與へたる数通の書簡 伊能甲之助藏等による。）」

この文中の伊能甲之助藏の書簡は、次の四通で

あり、今も私の家に残されている。

- ① 文化九年一月二日付け  
② 文化九年一月二六日付け 小倉から  
③ 文化九年三月五日付け

鹿児島から

- ④ 文化一〇年三月七日付け  
平戸領大島神ノ浦から

西宮から

#### (十五) 地圖の整理及江戸府内街道繫測

しかし、帰府の翌々日の五月二四日に、忠敬は「八丁堀亀島、桑原隆朝明屋敷へ参り一覧、家内普請手入等の指図」（忠敬江戸日記）をしており、六月三日には引っ越しを終わっている。二次測量出立のときから望んでいた亀島辺への転居は、帰府間際になつて急に決まつたことになる。

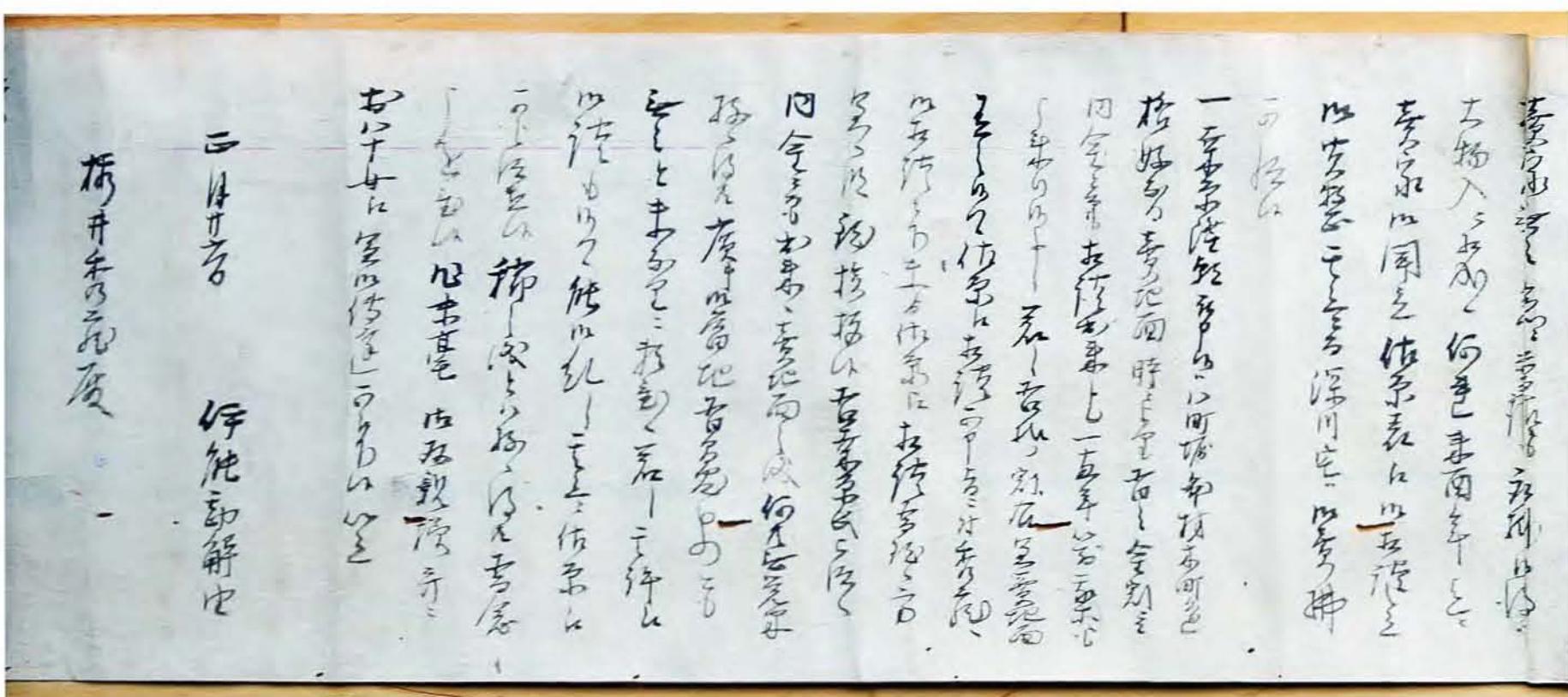
当時の桑原家は、ノブの弟の如則、すなわち忠敬の義弟が当主である。祖父の代、父隆朝養純（文化七年没）の代は日本橋元大工町に居住していたのだが、その後八丁堀の与力屋敷に移り住み、ふたたび他所へ移転した。そして其跡へ忠敬が住居を構えることになつたのである。

借地の面積は一五〇坪、八丁堀では与力は一人三〇〇坪ずつ宅地をもらつていたといわれており（三田村鳶魚・武家事典）、



図3 大谷亮吉「伊能忠敬」亀島移転の記述

この四通は、二年半に及んだ九州第二次測量（文化八年一一月から同一一年五月）の間に書かれている。忠敬の江戸帰着は五月二二日であるが、この直前の同年三月二日付け、三月二一日付け及び四月二五日付けの妙薰・りて宛て書簡でも、まだ転居先は決まらず、深川宅の手入れ畳縫いを指示しているような状況にあつたのである。



その半分を借り受けたことになる。地代は月一両、黒江町は年四両であったので、相場の違いはあるとしても三倍に増えた。

前述の四通の書簡のうち②の、文化九年一月二六日付け小倉からの書簡の文中に次の記述がある。

「桑原隆朝申され候は 八丁堀本材木町辺に格好なる売地面時により之有り 金割にて内金にも相談出来申し候 一両年以前我等へも申し來たり候よし 若し右様の割合宜売地面之有り候はば佐原へ相談申すべき旨につき 秀藏へ御相談下され夫より佐原へ相談致させ候方宜候段 挨拶致し候 桑原氏仰せられ候内金にても出来候売地面の儀 何共覚束無き様候え共 広き御当地有間敷ものとも之無くと 夫なりに頼置候 若し其許へ御談も候はば能く糺し 其上に佐原へ仰せられべく候 稀の儀とは存ぜられ候へども 念の為申進置き候」

忠敬の亀島辻移転は、九州二次測量の後、黒江町の家では手狭になること、三年後には手入れが必要になり費用も掛かること、深川の地は所属する小普請組の支配や組頭、佐原の地頭津田家、天文方直属上司である堀田撰津守等との連絡には少々不便であったことなど考えた時、切実な問題であつたことだろう。この書簡には、隆朝の言葉を頼りとし、又なれば諦めながらも、わずかな期待をさせてきれない、忠敬の気持ちが表れているように思われる。

余談であるが、隆朝如則は八丁堀亀島から何處へ移転したのか。文化一年の忠敬日記・帰府直

後の五月二七日の記述に「芝新錢座 桑原隆朝宅立寄」とある。この日、早朝から測量中世話に

なつた九州諸大名屋敷へのお礼廻りをしている、その途上のことである。芝新錢座丁は町屋で、その眞近の愛宕下には仙台藩上屋敷、中屋敷がある。時の藩主は文化九年に相続したばかりの斎宗公で、此時一九歳、体が弱かつたのか五年後に二十四歳で亡くなっている。隆朝が治療にあたつたといわれる人である。

このようなことをつなぎ合わせてみると、隆朝は忠敬九州測量中の文化九年以後、藩の要請により藩邸近くに住むことになった。そして、その時期は忠敬江戸帰着間際であったと推定できそうである。その後、隆朝やその家族が度々の忠敬宅を訪れているが、ここから亀島までは半里程、あまり往来に無理のない距離にある。

#### 桜井秀藏宛て忠敬書簡——読下し文

以上、自家に関わること等々を書き連ねましたが、今回は、そのところはさておき、まずは、この書簡文（忠敬の実筆（図4））をお楽しみいただきたいと思つております。

追記 亀島の忠敬宅（地図御用所）は桑原隆朝宅の借用か買取りではないか

忠敬の書簡や日記などをみると、「売地面」、  
「売家」など土地建物は区別している。九州二次  
から帰つた五月二四日の日記では「桑原隆朝明屋  
敷」と書かれ、同二九日の日記には「桑原隆朝跡  
借地の儀：実は百五十坪程の借地に候得共」、ま  
た七月三〇日の文章には「当月文地代金壱両遣

用又は買取り「普請手入」したのではないかと思われる。

三田村鳶魚の本に、八丁堀の七不思議と言われる中に「儒者医者犬の糞」というのがある。これは与力、同心が拝領した屋敷地を貸地にした。しかし、ここは武家地なので一般の町人は住めない自然に儒者と医者が集まつて住んだと書かれており、貸地は広く行われていたようと思われる。

また、「百五十坪の借地」であるが、日記文中の「五」の文字は不鮮明で「八」とも「九」とも見え判別が付き難い。本文では、大谷亮吉本の「百五十坪」としてある。

と相考へ候に去年中横川岸出府 手入れにて金参

拾五六両相掛かり候 夫へ古蔵を添へ金式十両に

売り候も少し下直にも存じられ候 夫は兎も角も

新造作を直に売り候ても半金にもならざるものに

候 今深川留守宅賣払い亀島八丁堀辺に相應の売

家これ無き候節は来る酉秋暮に帰府候ても 地図

取調べ仕立に差支へ 上に対し不埒にも相聞へ候

間 先ず御近所其外勝手向き宜しく候所にて賣家

買ひ整へて後

深川宅は売り候様に致し度く候 其の節は下直煮  
ても宜しく候 広き御地ながらも賣家買ひ整へ申  
さず候ては安心いたさず候 深川宅は賣払い相應  
の賣家これ無く 急に普請にも取掛けり候得ば大  
物入りに相成り候 何れ来る酉年迄に賣家御聞立  
て 佐原表へ御相談の上御買ひ整へ其上にて深川  
宅は御賣払い給ふ可く候

一桑原隆朝申され候は 八丁堀本材木町辺格好な  
る賣地面 時によりこれ有り 金割にて内金にて  
も相談出来申し候 一兩年以前我等へも申し来り  
候よし 若し右様の割合宜き賣地面これ有り候は  
ば佐原へ相談申可き旨に付き 秀藏へ御相談下さ  
れ夫より佐原へ相談致させ候方宜く候段挨候拶致  
し候

右桑原氏仰せられ候内金にても出来候地面の儀  
何共覺束無く存じ候得共 広き御当地有る間敷  
きものにもこれ無くと夫なりに頼み置き候 若し  
其許へ御談も候はば能く御糺 其上に佐原へ仰上  
られ可く候 稀の儀とは存じ候得共念の為申し進  
置き候 末毫乍らご双親様並びにお八十女へ宜し  
くご伝達下さる可く候 以上

正月二六日

伊能勘解由

桜井秀藏 殿

**【編集部注】** 地図御用所は与力・藤田からの借  
地に桑原が建てた家を借用又は買取ったのではな  
いか。これは新説で賛成です。

また、黒江町の隠宅は、測量日記に出てくる幸  
七店という住所名から、世間では借家と考えてい  
る人が多いようであるが、蔵もある忠敬の持ち家  
だったことが本状で確認できる。

ここまで書いて、偶然、箱田良助の書状を眺め  
ていたら、第二次測量帰着後、箱田が国元の弟・  
池田彦四郎にあてた文化一年五月二五日の書状  
に、次のような文言が見つかった。

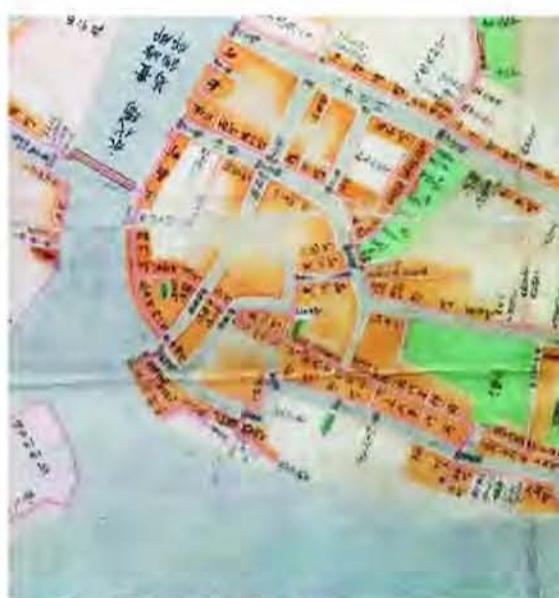
「・・・当月廿二日帰府仕候：伊能先生之屋敷、  
江戸深江町表川岸ニ有之候處、此度八丁堀か女島  
(亀島)にて、医師之家を買調 此節造作中ニ御  
座候・・・」  
とあるから、桑原隆朝(如則)から買い受けたこ  
とがはつきりした。

第一次測量のとき一四歳で、五五歳の忠敬にし  
たがつて蝦夷地を踏破し、第六次測量まで従事し  
たが、四国測量の途中で、何があつたかわからな  
いが大阪から江戸に帰される。  
隊員を罷免されたわけで、以後測量に従事して  
いない。何があつたかを、知りたいと思つてゐる  
が、まだ記録には出くわさない。

帰府後は隠宅の留守番をしたり、旅先の忠敬の  
指示で用事をたしている。後に桜井家に養子に入  
る。この書状はその頃のもの。やがて養子先もし  
くじつて、隠宅に戻る。

第九次測量隊が伊豆七島へ向かうとき忠敬が、  
秀藏はゆかなくともよいと止めたのを、すぐそこ  
までと、押して出かけ、品川まで送り、酒を飲ん  
で帰宅する。病中の忠敬は、これを咎めて自宅か  
ら追い出す。佐原本宅にも寄せつけるなどいう。  
江戸と佐原の縁者の間を往来していたが、のち  
佐原に住んで手習い師匠で生計をたて、世を終わ  
る。観福寺の伊能三郎右衛門家墓地入口の右側に  
弟子達が建てた立派な墓碑がある。

一四歳のときから現場を走り廻った秀藏の後年  
は大変氣の毒に思う。有能な若者が大好きだつた  
のは分かるが、波長の合わない者にも、もう少し  
やりようがあつたのではないか。(W)



深川黒江町付近  
(伊能図「江戸府内図」より)

## 伊能忠敬と桜井秀藏

本書状に登場する桜井秀藏は忠敬の二男である。  
「ビデゾウ」ではなくて「シユウゾウ」と読む。

これは忠敬が「周蔵」と間違つて手紙に書いてい  
るから明らかである。浅間山大噴火の年に妻ミチ  
を失つたあと一緒に暮らした内妻との間に天明六年  
(1786)に生まれた。

高松藩久米栄左衛門伊能測量官

解説  
渡伊藤一郎子

一手先ノ棹通シ人夫積リ  
一、梵天持 八人

舟測量ノ時計リ入用ノ  
梵天持船  
但シ壹艘二付水夫四人  
繩引船  
但シ水夫同断  
電懸リ見善舟

三  
壹  
艘

**久米栄左衛門** その昔、見渡す限りの塩田が広がっていた四国の坂出市。その塩田開墾の中心になつたのは、久米栄左衛門通賢だつた。同じ讃岐の平賀源内が亡くなつた翌年の一七八〇年大内郷馬宿村（現在の東かがわ市馬宿）で生まれた。子

但シ右ノ人夫ハ隨分小船ヲ功者(こうしや)ニ乘  
者ニ被仰付候事 陸測量ノ節ハ何人ニテモ指支無  
御座候得共、最早霜月頃ニモ相成候得バ 西風強  
ク浪荒ク時節ニ御座候間、余り度々磯辺ヲ上り下  
り致事甚ニ手間取、御用不弁利ニ御座候間、是非  
海辺ノ小功者成者ノ事

但シ七十石積舟ノ天摩（伝馬）壱  
小功者ノ水夫式人ヅ、  
測量方御役人中 召船壱艘  
但シ猪牙船家形付水夫四人  
一、歩行板梯子積舟 壱艘

のとき、大坂の間重富（はざましげとみ）の門に入り、四年間、算学と天文・地理・測量を学んだ。

一、唐繩引 人足六人  
但シ達者成物ノ事

一、鍼(ママ)台持 人足壱人  
一、半円台持 人夫壱人

ジナルの測量機器を制作して、伊能測量の一年前  
こ藩内の測量を終えていた。伊能隊を迎えた祭は、

但シ箱共 右人夫ハ磯辺並ニ遠山見渡シ案内の  
者ニ被仰付候事 此人足ハ測量方御役人中ニ始終  
附添ニ相成ル人足ニ御座候間、測量場所ニテ度々

とは少し違つた記録を残している。久米の技術レポートは高くて、千石工事や悲鳴工事も丁寧で、明了

モ是役人計リニテモ遠山見渡スニ不案内ノ儀モ御  
御座候事 大遠引ニシテ案内役人御打ち被成候云

川改修工事の設計なども手がけている。また、史

右極道沙人足合 挑六人 是ノ一手先發

数年以上前に、久米氏の史料を集積する坂出市の

しつかりした人間がいいと指摘する。その他は人足数の覚えである。

以下、栄左衛門の記録を眺めてみよう。この部

分は測量作業に必要な人足数と作業を円滑に進め  
るための人材配置上の注意が記されている。状況

の記録と共に、参考意見が貴重である。

一、御召船八挺鯨 船積り覚  
但シ朝昼止宿ヨリ亦止宿迄 送船ノ積リ 壱艘

伊能忠敬氏高松ヨリ書状御差出シ被成候表書写

江戸浅草御藏前片町  
預賃御用所高喬作右

伊能勘解由  
行戶屬御行  
不二子木村行



是ヨリ止宿牟礼（むれ）村

後手ノ村順道観

一、木多村 拾丁三拾八間余

一、春日村 拾丁三拾三間

是ヨリ式丁三拾間ハ相引橋也

一、西潟元村 東潟元村 拾三丁四拾六間

一、古高松村 三丁の五間

一、屋島村 拾壹丁四拾壹間

但シ古高松境ヨリ藤目ばし迄  
式手ノ道程合四里の七丁式拾七間

三木郡

一、牟礼村止宿 是ヨリ一手ハ安治沖大島渡海也

一、牟礼村 拾九丁参拾壹間余

一、安治村 九拾丁五拾四間余觀音端迄

郡境ヨリ安治人家入口、安治ばし迄四拾六丁

式拾七間

一、安治止宿迄道程壹里三拾丁余

同所島々

一、大島周辺 四拾九丁

一、甲島周辺 九丁式拾壹間

一、鎧島周辺 拾八丁の四間

一、稻木島周辺 拾壹丁三拾三間

一、高島周辺 式拾壹丁三拾式間余  
島々周辺合参里の九丁

一、安治村止宿 山田郡

是ヨリ壹手ハ島渡海、今一手ハ陸へ量  
一、安治村

一、鎌野村 五拾三丁式拾五間余  
道程メ式里式拾五丁五拾間余

右庵治ばしヨリ鎌野村三木郡大町境迄

式拾三丁拾式間  
道程メ壹里式拾九丁三拾四間

是ニ鷹島一ツ添終、津田止宿迄舟

同日

後手ハ右二本木迄舟ニテ戻り右二本木ヨリ量

始

一、鴨部下庄 右同所ヨリ小田境迄  
リ量始メ

一、大町村 拾五丁参拾間

一、小田村 天神山ノ南浦戸迄終

道程

メ壹里三十二丁五拾八間

津田止宿迄舟

同日

後手ハ止宿ヨリ跡ノ鎌野大野境へ戻リ 是ヨ

リ量始メ

一、大町村 式拾七丁の九間三合

一、津田村 四拾五丁の式間

一、鶴羽（つるわ）村 四三丁四拾七間余寒川郡

終ル

道程メ式里拾六丁五拾間 止宿迄舟

同日

一、津田村止宿 是ヨリ二手

後手ハ直二前日打終り、郷泊り波戸迄舟ニテ  
御通行、同所ヨリ量始メ

一、津田村 四拾五丁の式間

一、鶴羽（つるわ）村 四三丁四拾七間余寒川郡

終ル

道程メ式里拾六丁五拾間 止宿迄舟

同日

一、津田村止宿 是ヨリ二手

先手ハ止宿直二駕ニテ大内境迄御通行  
是ヨリ量始メ

一、馬篠村 式拾式丁五拾六間

一、小磯村 式拾式丁三拾八間

一、西村 四丁八間

一、横内村 六丁五拾二間

右打始

ヨリ鶴羽境迄一手先分

十月二十七日小田村苦張打終ヨリ同

御止宿迄 式拾六丁余

右打終ヨリ構谷（かまいだに）迄 六拾丁余

注 釜居谷の地名あり、宛字で構谷

右苦張ヨリ津田小馬立迄一手先分

丁数七拾壹丁余

津田小馬立ヨリ始郷島泊り人家迄

式拾丁余

右打始ヨリ津田御止宿所通り浜迄

五拾丁余

右打始ヨリ鶴羽境迄一手先分

六拾四丁 合七十壹丁

外二七町余り鷹島添

津田御止宿所ヨリ

鶴羽村西境ヨリ量始メ小磯境住吉鼻迄一手  
先分 道程メ六拾六丁余

同日先手分

小磯住吉鼻ヨリ松原村新川迄

道法メ七拾壹丁余

三本松御止宿ヨリ

打終、松原新川ヨリ量始メ安戸村瀬鼻迄

道法六拾丁余り

同日先手分

安戸（あど）村瀬鼻ヨリ国境迄

道法六十丁 終

ここからまた別の資料である。測量の途中、遠山  
仮目当て（遠山望見法）の目標とした方位と思わ  
れるが、表示されている方位をどう読めばいいの

か分からぬ。

得意な方、御教示いただけると有難いと思つて  
いる。

文化五年 久米栄左衛門 控

測量方御用鍼方位記

平島大ホシ  
稻木松  
高島神子松  
観音端  
坂ノ手観音平谷口より  
觀音端印稻木松  
黒崎印高島神子松  
大串端先左五七二五〇  
先右四五二〇〇  
先左一一〇〇  
先左四〇一〇〇  
先左六四二四〇〇

折目で読めず

古高松竜王  
彈端口り屋島南角  
右蠍印

同口島式前板

前右六一十一四〇〇  
前右六二三八〇〇  
前右八五〇二〇〇  
前右三四二五〇〇  
先右五五五〇〇  
先右三十〇五五〇〇  
先右八一〇〇〇  
同所より見送り平谷印  
口口松太鼓西端印  
雨タケ太鼓西端印  
坂手觀音高島神子松  
大串端先左二五二五〇〇  
先左六三二五〇〇  
前左八十〇〇〇  
前左三八四五〇〇  
前左三〇三〇〇〇  
前左二四二〇〇〇先左二四二五〇〇  
先右六五五〇〇  
先右五一二〇〇  
先左四二四一〇  
前右八三二五〇〇  
前右八二一〇〇  
前右八三二五〇〇  
先右八二三〇〇太鼓端より  
同所西端印  
大串端太鼓端より  
鴨部西庄竜王先右〇十二一五〇  
前左八十〇〇〇先左三八一〇〇  
先右一〇一〇〇  
前左八五二五〇〇  
前左六五二〇〇  
先左七二〇〇〇弁井端より  
御殿端印  
女木島井  
大島森

小串猿子	前左三八四五〇
小串上松	前左三五三五〇
雨タケ	前左三二三五〇
鴨部竜王	前左三五四〇〇
五剣山	前右五十二三八〇
高シマ神子松	先左三七一〇〇
坂手觀音	先左六十〇三〇
	先右一四式〇〇

小串猿子	前左三八四五〇
小串上松	前左三五三五〇
雨タケ	前左三二三五〇
鴨部竜王	前左三五四〇〇
五剣山	前右五十二三八〇
高シマ神子松	先左三七一〇〇
坂手觀音	先左六十〇三〇
	先右一四式〇〇

大町村境印より	前左三八四五〇
大鼓印	前左三五三五〇
高島神子松	前左三二三五〇
小串猿子	前左三五四〇〇
同所上庄	前右五十四〇〇
鴨部下庄竜王	先左三十九〇〇
	先左三九〇〇

大町村境印より	前左三八四五〇
大鼓印	前左三五三五〇
高島神子松	前左三二三五〇
小串猿子	前左三五四〇〇
同所上庄	前右五十四〇〇
鴨部下庄竜王	先左三十九〇〇
	先左三九〇〇

愛染寺印	前左七四二五〇〇
広治院印	先右三八三八〇〇
小串上松	先左三六三五〇
黒崎端印	先左六十〇〇〇
	先左七六二五〇
小串端より壱縄南口り	前左七一〇
眞球島印	前左十六三五〇
愛洗寺印	前右五十〇三〇〇
古高松竜王	前右五四三五〇
広治境印	前右七九〇〇
太鼓印	先右三一一〇〇
黒崎印	先右一五三〇
五剣山高	先右七一五三〇
	先右七一五三〇

愛染寺印	前左七四二五〇〇
広治院印	先右三八三八〇〇
小串上松	先左三六三五〇
黒崎端印	先左六十〇〇〇
	先左七六二五〇
小串端より壱縄南口り	前左七一〇
眞球島印	前左十六三五〇
愛洗寺印	前右五十〇三〇〇
古高松竜王	前右五四三五〇
広治境印	前右七九〇〇
太鼓印	先右三一一〇〇
黒崎印	先右一五三〇
五剣山高	先右七一五三〇
	先右七一五三〇

大串西端岩印より	前左七九四〇
小串端印	前右七九四〇
古高松竜王	前右四九二三〇
五剣山高	前右五二三〇
太鼓印	前右八一二三〇
観音東端	先右八一二五〇
黒サキ印	先右六一一〇〇
坂手觀音	先右二七四〇〇
長磯印	先左五二〇〇
	先左八三二〇〇

大串西端岩印より	前左七九四〇
小串端印	前右七九四〇
古高松竜王	前右四九二三〇
五剣山高	前右五二三〇
太鼓印	前右八一二三〇
観音東端	先右八一二五〇
黒サキ印	先右六一一〇〇
坂手觀音	先右二七四〇〇
長磯印	先左五二〇〇
	先左八三二〇〇

鶴屋谷(力)の西端印より	前左七九四〇
馬歛地平手坂口所	前右二六四〇・スミ
坂手高	先左三六〇〇
馬歛角	先左五二三五〇
小田波戸元	先左七五〇
同天神波戸元	先左七九四〇
	先左七九四〇

鶴屋谷(力)の西端印より	前左七九四〇
馬歛地平手坂口所	前右二六四〇・スミ
坂手高	先左三六〇〇
馬歛角	先左五二三五〇
小田波戸元	先左七五〇
同天神波戸元	先左七九四〇
	先左七九四〇

先右三六〇〇	前左二五六〇〇
先左二五六〇〇	前左五五二〇〇
先左三三〇〇	前左五十〇〇〇
前左二五二五〇	前左二五二五〇
前左一七二〇〇	前左一七二〇〇
	前左一七二〇〇

先右三六〇〇	前左二五六〇〇
先左二五六〇〇	前左五五二〇〇
先左三三〇〇	前左五十〇〇〇
前左二五二五〇	前左二五二五〇
前左一七二〇〇	前左一七二〇〇
	前左一七二〇〇

高津浦中より	前左一四五〇〇
同所西端	先左三六四〇〇
坂手高	先左六十〇〇〇
馬歛	前左七六二五〇
天神波戸元	前左七一〇
針元東端	前左七一〇
	前左七一〇

高津浦中より	前左一四五〇〇
同所西端	先左三六四〇〇
坂手高	先左六十〇〇〇
馬歛	前左七六二五〇
天神波戸元	前左七一〇
針元東端	前左七一〇
	前左七一〇

高津浦中より	前左一四五〇〇
同所西端	先左三六四〇〇
坂手高	先左六十〇〇〇
馬歛	前左七六二五〇
天神波戸元	前左七一〇
針元東端	前左七一〇
	前左七一〇

江泊り印少北より	先右一四五〇〇
	先左三六四〇〇
	先左六十〇〇〇
	先左七六二五〇
	前左七一〇
	前左七一〇
	前左七一〇

江泊り印少北より	先右一四五〇〇
	先左三六四〇〇
	先左六十〇〇〇
	先左七六二五〇
	前左七一〇
	前左七一〇
	前左七一〇

久米栄左衛門伊能測量控

ここからまた史料が変わります。色々な場所での接待関係の記録を集めたモノのようです。栄左衛門は藩の責任者ですから、各地の情報を集め指示せねばならなかつたでしよう。

坂手高	先右一三五五〇
沖島西角	先左八七〇五〇
筆一掛松	先左八八三四〇〇
通念島梵天	前左八七〇〇
犬戻り端より	
辰ヶ端印	先右五四〇〇
馬歯	先右四九〇〇
一ツ島高	先右三六〇〇
双子島中	先右二三三五〇
坂手高	先右一一三〇〇
金掛松	前左八五〇〇
沖島西角	前左六八〇〇
通念寺梵天	前左六二三五〇〇
猿子島高	前左四一三八〇〇

や助(力)右衛門  
手代伝次郎

川江庄や助(力)右衛門

測量一件聽書  
八月

先左八一  
Q Q

先右五九〇〇  
先右三七三五〇  
先右三四二五〇〇

一、金式兩式步式朱  
六十八文也

此金百七十八文五分

島ちりめん 式足

松山領  
一、布三反 井納

\*井納・・・伊能のこと、宛て字。

但シ壹反二付金壹兩ツ、引受

一、同式反ツ、秀藏殿並同心中

但シ右同断

一、同壹反ツ、内弟子中

但シ右同断

一、小杉七束ツ、いの党中央へ \*いの・・・伊能

くわし折中共

\*くわし折・・菓子折

但シ金三步二引受

一、同五束ツ、中間中

但シ金式百足二引受

右の通 □ 奉行より自分

進物の由、尤代官より兼帶

相勤候心ニ相聞申候

一、同五十丁 内弟子

但シ金式百足二引受

右の通 □ 奉行より自分

進物の由、尤代官より兼帶

相勤候心ニ相聞申候

一、同五十五丁 内弟子

但シ金式百足二引受

右の通 □ 奉行より自分

進物の由、尤代官より兼帶

相勤候心ニ相聞申候

一、同六十五丁 内弟子

但シ金式百足二引受

がする。エスカレートすると品物を貰つたことにして、という話も一部にはあつたかも知れない。

料理壹汁五菜前後  
平日壹汁三菜程(力)

掛(力)り、大庄屋、小庄屋

総舟三拾 \*使われた船数

小屋式間二四間半、三仕切 \*休憩用小屋

但土間縁屋 \*厘・・・小さい区切り

御道中右式人

煙草盆火口杯

押送人足四拾人

松山同御領五十人

郡切三拾人

\*郡切・・ぐんかぎり

メ八十人ニテ二手遣

同切人夫、松山八百三十人

荷物送方今治百人計

実ハ八十人計ニテ相借候よし

小庄屋など進物通

伊能御親子二間風呂一所

但雪隠ハ一所ニテ宜候

内弟子中壹間 風呂壹つ

若徒壹間 雪隠一所

小者 壱間

坂部小者、棹取ハ別間

坂雪隠壹つ持送 \*持ち運びトイレか

榮左衛門聞説

\*聞説・・・聞くところによれば

一、押通候人足五十人

但シ一手先ニ式拾五人ツ、ニテ

二手先も積り

右同断

一、船九艘 壱手先分

但シ壱艘ハ鯨船八艘ハ蠍船

右の通二手先分用意

一、朝刻限延引の時ハ甚御立腹の由、朝七ツ時迄ニ人足万々手都合仕、相待居申候様可仕の事

一、御本陣庭の片脇へ目印建の事

但シ五色もめん長壱丈計、長間

分縫合有之候是ハ御宿へ持送り

一、初て止宿並御他領へ御移りの節は、御酒差出シ但シ吸物御取肴見合

一、御宿御仕成方、御間割

但シ御宿壱軒ニ候ては六間相入候 尤手狭

の時ハ二軒三軒ニても致候事

但シ相応の家居無之所ハ寺院ニても御宿仕

構候事

一、御朱印台は伊能様一間ニて相済候事

一、御熨斗三方御菓子は間毎ニ入候事

一、御膳椀御上下の無差別差出シ候事哉

答

但シ朱か黒か有合鹿末無之品差出候事 但上

下無差別黒宗和類相用候

\*宗和類・・金森宗和の好みの、黒又は朱

塗りの低い四足膳、懷石用で民間では本膳

に用いた。

一、御泊り御料理向の事

一、御昼御料理の事

此ニケ条初て御入込の御泊り城下御泊り、御当着御出立の節、上下無差別壱汁五菜、其余御通

行中ハ御休泊共一汁三菜の事 但シ御昼野間、

御船中等ニても差出し候時ハ煮肴、煮染（にしめ）の類ニテ差出シ候事

一、宮仕十五六男子 拾五人袴着用の事

一、床飾付の事

但シ御朱印台の外都て飾向無之候事 刀掛有

之見苦敷無之品相用、御朱印台下へもふせん

\*もふせん・・毛氈

一、御召船へ御舟頭壱人宛

但羽織、袴ニテ相見へ申候

一、伊能様御召船 壱艘

石数五拾石積程

但シ御領主様御紋付麻幕内へ紫幕、御菓子、熨斗、三宝、燭台、もふせん、ふとん、刀掛、多葉粉盆

一、坂部様御召船 右同断

但シ右同断

一、お御茶方船 式艘

但シ御召船二付添家形野風呂御坐候ても、

土びんニても数六ツ計

一、道具積廻シ船 式艘

一、梵天竹持、繩引、棹取、股木持、乗船六艘

但シ一手ニ三艘宛

一、御駕船 式艘

一、御仮雪隠 式艘

一、御用船 五艘

但シ海上ニテ臨時御用

一、いろは印付船 式拾艘

但シ臨時御用意船

一、御召船加子 七拾人

但御仕着

一、魚船加子 三百六拾人

右の船印不残御替紋九曜舟ノ印立、

別ニ紙幟二付夫々印別人足ニモ

右紙幟合印ヲ木札書付致シ腰二付居申候

右人足宿門々紙幟の印立置申候

土州御献上の品

一、仮雪隠 杉戸四枚角ヲ合 屋根板覆  
但手水鉢手掛け

一、御夜具葛籠二入、御名札付二て  
御国中持送りの事

一、蚊帳並ゆかた 同断

一、御本主様 鰹節百本  
 小杉原三十束  
 右同断八十本ツ、  
 小杉原二十束ツ、  
 鰹節五十本ツ、  
 金子式百足

一、同心中様 同百足ツ、  
 侍 桨取 銀拾匁ツ、  
 小者五

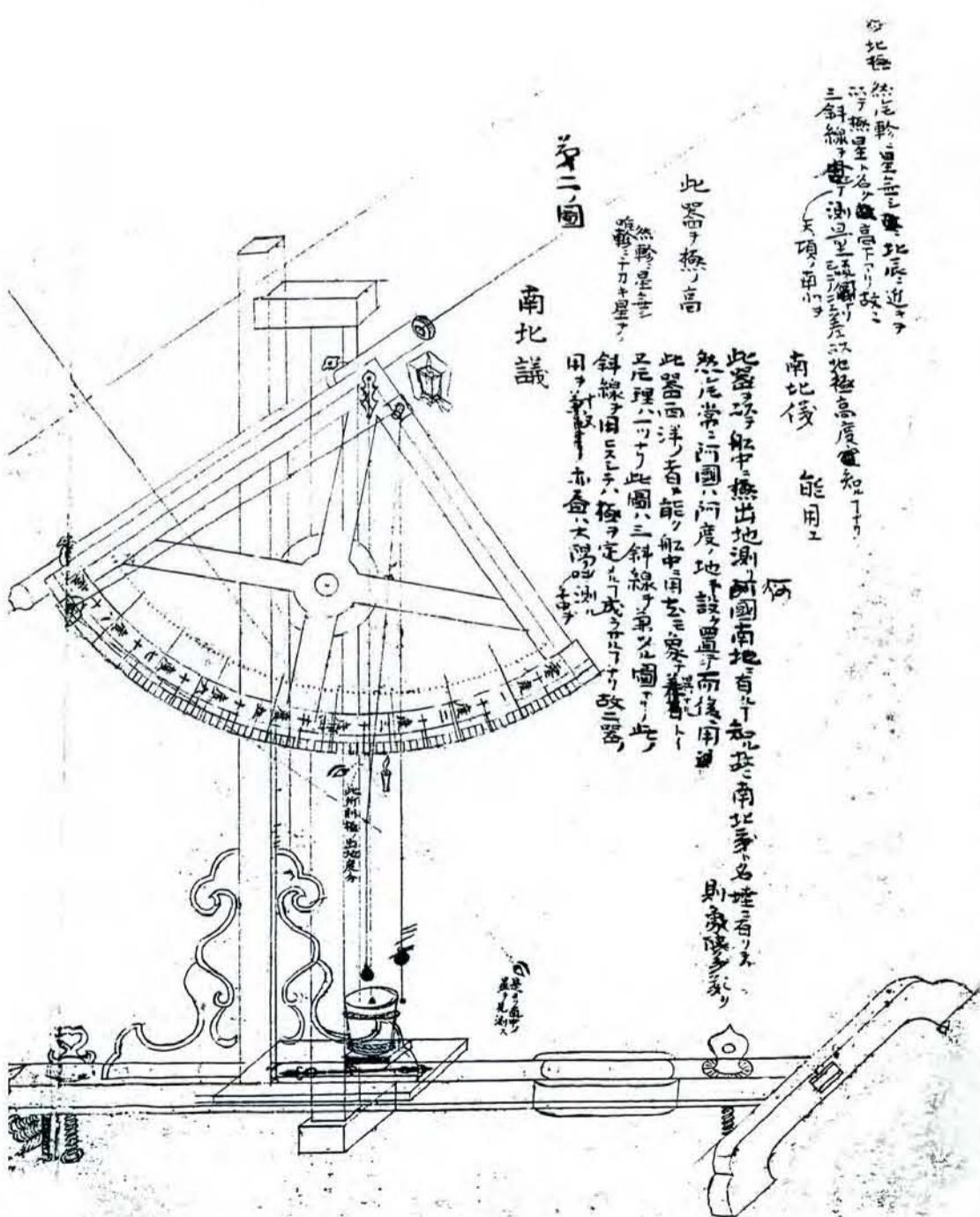
宇和島御献上の品

一、御本主様 綾布三反  
 金子三百足  
 綾布壹足  
 一、同心中様 金子三百足  
 綾布壹足  
 一、稻生様 金子百足  
 綾布壹足  
 一、内弟子様 金子百足、  
 一、侍 金子百足ツ、  
 一、棹取 銀式兩ツ、  
 一、小者五人 鳥目三百文  
 ツ、

右の通御越境の為御祝義、深浦二て差上申候  
 一、御城下御入込の節ハ 相応の品差上候様相聞  
 申候

久米栄左衛門が収集した謹呈品のリストである  
 が、小者に少額の現金を与えた例はあるが、ここ  
 では忠敬にも三百匹が渡されている。珍しい。

おわりに  
 まことに、不完全な地域史料紹介であるが、御容  
 救願いたい。入力は高宮勲さんを煩わせた。  
 絵が無いとさびしいので、久米栄左衛門自作の象  
 限儀を紹介する。



左図：久米栄左衛門自作の象限儀

## 窪谷婦人妙真のこと

### 窪谷悌二郎

『伊能忠敬研究』一二〇一二二年 第六六号に、伊能楯雄氏の随想 「香とりの日記」の頃が記載されていました。

昨平成二四年は、この中に記載されている法名・妙真こと窪谷せやの「生誕二五〇年」の年であり、この節目の年に伊能忠敬研究会の会報で紹介頂けたこと、有難く感謝致します。此處で、生誕二五〇年を追憶して妙真さんのこと、潮来にて伝承されていることを書き述べてみます。

妙真さんは、私悌二郎の家・窪谷仲右衛門家の本家である窪谷庄兵衛家九代藤右衛門維則夫人でした。

窪谷庄兵衛家と窪谷仲右衛門家との続柄は旧く、庄兵衛家初代與治郎の父窪谷山城幸文が、下総国窪野谷村から移徙し、潮来村に土着したのが天正年間頃、初代與治郎、二代目與治郎と続き、三代目を継承したのが、仲右衛門家初代忠右衛門の父藤治郎でした。

庄兵衛家は水戸藩潮来村にて回船業を営み、仙台河岸にあつた仙台藩の御穀宿を預かつて居りました。当時、仙台藩は、初代・貞山公政宗の治世、慶長一年（一六〇六）には、新たに常陸国に於いて龍ヶ崎村を含め二六ヶ村で一万余石の飛地、龍ヶ崎領が与えられました。それから一九年後の寛永二年（一六二五）八月二三日、貞山公は江戸を出立して、初めての龍ヶ崎領の検分を行なわれました。

安永九年子五月

仙台様御下向鹿嶋通行之節御目見願書写  
乍恐以書付奉願上候

一、此度御下向被為遊候付、鹿嶋御通行、当所御

本家窪谷庄兵衛家に残されている『仙台屋敷事件旧記より書抜覚』（窪谷孝太郎著）には、次の文が記載されている。

九月丙戌小朔日丁未。  
板久へ御立、鹿島御見物ト云々 御参詣アリシ  
ヤ不知。

とのみ記述されています。

仙台藩主で潮来に来られているのはお三方で、初代貞山公政宗、五代獅山公吉村、七代徹山公重村であり、重村公は二回お出でなされています。そして吉村公は『鹿島海道記』享保一三年（一七二八）を、重村公は『鹿島道之記』安永九年（一七八〇）をそれぞれ書残されています。

七代重村公は、幕府天文方支配若年寄・堀田撰津守正敦の異母兄

旅館被仰付、夫ニ付、拙者儀、先年之通献上物仕、於御本陣御目見被仰付被下置候様奉願上候  
一、拙者先祖御借金御用相達御出入罷在候ニ付貞山公様より上意之上、曾祖父藤右衛門、幼年之節、名ヲ百介与被下置、御目見被仰付、御紋付御上下拝領難有冥加至極申伝、家珍仕罷在御代替等之節、江戸於御屋敷御目見仕候節茂先年より引続右御紋付御上下着用御目見仕来り恐多冥加至極難有奉存候  
安永五申年鹿嶋御通行當所御旅館被仰付候節茂先年之見合ヲ以願書指上候義ニ御座候  
一、先年当所江御屋敷御立被遊候節茂、拙者先祖江御内々被御渡御屋敷ニ可罷成場所等之義迄茂御國元並江戸御屋敷様江茂度々罷出、御双方様御相対申立、慶安ニ丑年拙者先祖右御屋敷之義、万事□□斗御草分仕、直々御穀宿御用被仰付、只今迄百三十年余御用首尾能相勤、罷在候儀も御座候  
何卒願之通、當所於御本陣御目見被仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合ニ奉存候  
以上

安永九年子四月

潮来 御穀宿

窪谷庄兵衛

仙台御屋舗様

これが書かれた安永九年（一七八〇）とは、八代目庄兵衛信久の時であり、仙台藩主は七代重村公の治世。

重村公のご帰国時、潮来通過に際して願いされたものである。

信久の云う曾祖父藤右衛門とは庄兵衛家四代目藤右衛門重久のことであり、二代目與治郎の二男である。

家督は兄藤治郎が取つていたので藤右衛門を名乗つていたものと思われる。

重久は、元禄一二年（一六九九）に歿している。歿年齢は不詳。

貞山公が板久に來られた寛永二年（一六二五）は七十四年前、生までもない頃に百介と云う名を拝領した。

このことに憚つて三代目藤治郎は、弟藤右衛門が成人したのに伴い家督を譲り、実子を伴つて隠居した。

そして、実子の忠右衛門を分家させ、後の窪谷仲右衛門家を創始させた。

庄兵衛家三代目藤治郎 明暦 三年（一六五七）歿

仲右衛門家初代忠右衛門 延宝 五年（一六七五）歿

庄兵衛家五代目安貞 元禄 元年（一六八八）歿

庄兵衛家四代目藤右衛門 元禄一二年（一六九九）歿

右の年代から考察すると、仲右衛門家の創始は一六五七年以前、寛永後半から正保・慶安・承応（一六三七～五四）の頃と推測される。潮来村の年寄制度の制定は、『潮来沿革史』に次のように記述されている。

水戸藩威公以来、窪谷太右衛門、窪谷庄兵衛、窪谷仲右衛門、宮本平太夫、宮本山三郎、石田半右衛門、関戸利右衛門、関戸喜右衛門

以上八人は、水戸藩より代々潮来年寄を命ぜられたものである。

：

水戸藩祖徳川頼房公は寛文元年（一六六一）に薨去されている。

：

この兄弟の間には、兄藤治郎の女と、弟藤右衛門の嫡男とを娶せて庄兵衛家の五代目を相続させることにした。本家庄兵衛家と分家仲右衛門家としては希有なことであった。

それから庄兵衛家は、六代・安信、七代・了達、八代・信久と続いて来て、そして九代目。

窪谷藤右衛門維則

寛延二年（一七四九）生まれ、天明七年（一七八七）四月十六日歿、享年三十九

順譽寛察榮真信士

父、窪谷庄兵衛家七代目庄兵衛の嫡子・藤次郎信久

享保十四年（一七二九）に生まれて、文化八年（一八〇八）七月一日歿、享年八十

深譽慧通法達信士

母、下總國香取郡佐原村 伊能七左衛門女・ミツ

元文四年（一七三九）に生まれて、文化八年（一八一一）三月廿二日歿、享年七十三

徳譽妙智等倫信女

妻・セヤ

下總國香取郡佐原村 永澤忠右衛門尚俊女

宝暦十二年（一七六二）に生まれ、文政十二年（一八二九）三月十四日歿、享年六十八

相譽貞節妙真信女

父、佐原村伊能七左衛門の長男・永澤忠右衛門尚俊

寛保元年（一七四二）に生まれ、文化八年

母、佐原村 永澤次郎右衛門の女

天明元辛丑（一七八二）十月廿一日歿、享年七十一

縁了院常嚴日理居士

享年七十二？

円珠院妙証日□法尼

その存命中は、両親共健在であり、庄兵衛家では寛延年間（一七四八）から天明六年（一七八六）六月迄の三十八年間、潮来村の庄屋を務めていた。

父の八代目・信久は天明六年と云うと年齢五十八才であり、当時ではかなりの高齢である。『常陸紅葉郡鑑』によれば、「村年寄・庄兵衛・伴十野衛門」とあるように、藤右衛門維則が庄屋の職を補佐していたか、務めていたように思われるが、資料は全く残されていない。

先に引用した関戸覚藏が編んだ『潮来沿革史』第二巻第三章「人事」第三項に『窪谷婦人妙真』として収録されている。



左より、二代淨覺塔、九代栄真・妙真塔、十代順養子実成塔

唯、夫人に関するものが残されており、それらを羅列してみると当時の庄兵衛家の状態を知る事ができる。

潮来沿革史 第式巻 第参章 人事

三、窪谷婦人妙真

貞節の婦人に窪谷妙真あり、本名を世也と云う、北総佐原村永沢忠右衛門の二女、宝暦十二壬子年七月二十日を以て生る、天明元辛丑の年潮来窪谷藤右衛門に嫁す、妙真性温厚にして寡ん言沈黙苟も談笑せず、歌道及び茶の湯、裁縫の造詣深く又た琴曲に巧なり、妙真婚嫁数年にして窪谷氏災害切りに至り家産殆ど傾倒し、日々の生活にも差支ゆるに至れり、之れに反して生家永沢氏は郷党無比の富豪なれば、実父母之れを愍み窪谷を辞して家に帰ることを勧む、其意蓋し相当の家に再婚せしめんと欲するにあり、妙真辭して曰く、貧富は世の常なり、女子既に他に婚嫁す、貧なるの故を以つて去るに忍びず、然れども我はいま子なれば三十歳まで尽力し、多少家産の回復を見届け、女大学の七年子なれば即ち去るの遺訓に従うふべし、幸にして子を挙げんか、仮令粉碎身すと雖も、夫に事ひ、児を養ふを終身の勤めとなす、父母其動かし難きを知りて再び離婚をせまらざりしと、天明七丁未年四月十六日藤右衛門三十九歳を以つて病没す、妙真時に年二十六是れより髪を絶ち名を妙真と改め、自分が所有せる衣類中の絹布類及び結髪具等目星しきものを残らず売払ひ、其金を以つて亡夫埋葬の地に

順誉寛察栄真信士（亡夫の戒名）  
相誉貞節妙真存住（自己の戒名）

を刻したる石碑を建て、其の決意を示す、是れより寡居経営一に冗費を省き、節儉を主とし、断して華美を避く、傍ら女子に読書、習字、裁縫等を教授す、行方、鹿島、稻敷、香取の各郡中流以上の家庭に於ける婦女薰陶を受けたるもの数百人、各々成就する所あり、妙真常に好んで琴を弾んじ、月明の夜、花下の朝、低唱自ら娛む、適ま琴の稽古を望むものあれば、我是一家團欒の樂を欠くを以て、夫れに替ふるに琴曲を以てす、曲賦元より律に合わせず、之れを自己流都や云はん、故に他人に教ゆべからず、強て習はんとせば、去つて他師を撰べ、凡そ女子が婚嫁の後、良妻賢母と云はれんと欲せば、琴曲を習ふの暇あれば、女だいがくを通読し、女子たるもの、務めをわきまひ、孝経を読んで孝道の大本を識り、其任を尽すに心掛けよ、凡そ人の妻女たるものは、専ら家を整へ夫をして後顧の憂なからしめ、子孫の教養に力を注ぎ、将来一家繁栄の基を立つるが本文なりと、諒々訓諭倦むことを識らず、是の如きもの四拾余年、藩主妙真の貞節を聞き、時服其他金品を賜りしこと數次、後年家道大に興る。弟庄兵衛を順養子とし、家名を嗣かしむ、文政十二年三月十四日没す、年六十八、其後門人等相議して其行状と自ら作るところの琴歌を右に刻し、之を淨国寺の境内に建て、今に存せり、其の琴歌なるものは左に、

碑石に刻するところに依れば、以上記載の琴歌は妙真身上平成の感を表はしたるものにて、常に低唱したりしなが、人亦た其何の曲なるを知らざりし、妙真死亡後、其稿本を遺籠に得、之れを碑石に刻したるものなりしと云ふ、妙真の詠せられたる短歌あり

朝夕に 文よむたひに 思ふかな  
己がゆをしゆる 道は如何にと

そして、碑石に刻するとある石碑は、窪谷一族の菩提寺である淨土宗大永山淨国寺にある。子供の頃から顧みればともかく、よく事あるごとに移動をさせられた石碑である。

碑は、宮本茶村の撰文、『行方郡郷土史』、秋永毅堂註解『雙硯堂文集』水雲宮本先生遺稿』、大久保錦一編著『夢に挑んだ先人たち』に記載収録されている。

いくたひ袖にかゝるらん、  
梅なき宿になく鶯、  
月なきよ波のほとゝぎす、

秋の夜すから啼虫の、  
ぬれ衣きせて袖しばる、  
みさをゝたつるあまの船、

水のうたかたきえもせて、  
いまは六十路の年もへぬ、  
空にしぐれぬ髪の雪、

我世はかなくをいはつる、  
あわれかなしき身の上を、  
過にし人わ、あまかけり見む、

妙真君婦徳之盛當時既為郷黨標準則舉之雖以模範

於通天下婦女可也何啻親灸者僅數十百人所敢可私

邪是羣弟子之志也是以今不及具載立石者名氏云

嘉永六年癸丑春三月



窪谷夫人妙真君筆子等建立の碑

忠敬を江戸に尋ねたのは、妙真、五十四才の春であった。この翌年、文化十四年九月廿四日には順養子であり義弟であり、姪・せ代の夫でもあった一〇代庄兵衛高包を亡くしている。

また、「九十九里町誌資料集 第七輯上巻」  
『文政七年（一八二四） 諸用留 貫兵衛記』に、

十月九日 大森便二而別紙褒詞書届

鈴木弥左衛門板下

潮来村

庄司祖母

妙信

一青銅五貫文

右之者先年下総佐原村より縁付参候處廿六才之節夫相果一子も無之亡父弟重郎右衛門と申者致養子候所舅庄兵衛及極窮親類共見繼ニ而取續居艱難ニは候得共舅姑大切ニ取扱猶又亡夫一周忌之間其靈前江 も願□如存生相務候由ニ而親類共相憐度々再縁を進候得共承知不致且は困窮之□□役介ニ相成居候ヲ氣之毒ニ存舅姑等江 も相談之上奉公ニ罷出七ヶ年相勤暇ヲ取佐原村寔父方ニ罷在候處是又困窮□上相續致候兄致病死幼年之甥病身之嫂而已ニ而父母□□改候者無之ニ付里方ニ止リ女子共手習致指南兩親介抱致居候處舅庄兵衛儀も困窮老年故見るに忍び兼屋敷暮方之内より夫婦之者江年々衣類等迄相送其後兩親共相果候ニ付親類共江も相談之上佐原引拂潮来村江罷帰舅姑引請介抱之暇手習指南之謝禮ニ而孝養之介ニ致候尚又寡婦ニ而世評も可在之と常ニ容貌ヲ崩虫歯之由ニ而

むかしおもへば なつかしや  
かわればかはる 世のならひ  
夕陰またぬ 朝がほの  
花にならひて わがせこが  
はかなくなりし あだし野の  
烟の末の 村しぐれ  
いくたび袖に かかるらん  
梅なき宿に なく鶯  
月なきよはの ほととぎす  
ぬれ衣きせて なく虫に  
みさををたつる あまとふね  
水のうたかた きえもせで  
いまは六十の としもへぬ  
空にしられぬ 髪の雪  
わがよはかなく おえはつる  
あはれはかなき 身の上を  
過にし人は あまかけりみむ

伊能忠敬が書き残した日記五十一冊の内、最後の『江戸在記 忠敬先生日記 五十一止』を、佐久間達夫氏が解説され「家族・親戚往来分」として纏められたものがある。

この『江戸在記 忠敬先生日記 五十一止』は、文化十二年（一八一五）一月一日～文化十四年三月二十九日のものである。このなかに、

文化十三年二月九日 曇、微雨。潮来、妙真来る。

妙真永澤氏琴歌並引 佐原女弟子等建石  
妙真君諱世也永澤氏下總佐原人忠右衛門尚俊之女也嫁  
常陸潮来人藤右衛門窪谷維則早死無子以弟莊兵衛  
高包為嗣君及寡居自稱妙真敬養舅姑恩育子孫履操貞潔  
不妄言笑積數十年益堅是以當時郷黨間父母教導婦  
女者皆至指君以為其標準焉事達 公庭褒賜交下君  
傍善書兼嗜和歌亦自臨摸諷詠以娛耳未敢示人也而  
婦女乞姆訓受書法者門館滿晚作琴歌一篇以寓其身  
世平生之感低唱慢撫以自遣而人亦不知其為何曲也  
年六十八病終實文政十二年三月十四日也婦永澤氏  
君兄吉郎兵衛俊安之女自幼受其訓誨且傳書法一日  
得琴歌藁本於遺篋中始知嚮者所唱為其自述之辭然  
病其細字不便誦讀追慕之餘展拓臨之乃者女弟子佐  
原某氏等觀之以為是先師自叙豈可不垂之不朽以傳  
遺芳於後昆乎相共醵資謀以勒石永澤氏固辭其書陋  
劣不得髮弗衆執不聽因錄其梗概併鐫以為之引吁嗟

前歎をもかき老婦之如ニ相成介抱ニ傾極老之兩人夜具も手薄ニ付自分之衣類ニ而夜具寐間衣類等迄拵爲致便寐食物等之儀もよく心ヲ付萬事不自由無之様取扱候處庄兵衛儀老病ニ而半年餘取臥居相果候得共昼夜聊も不怠病床ニ付添居ニ便共人手ニ不懸懲ニ致看病其後姑も相果候處是又同様病中之介抱手ヲ無残處取扱候由右庄兵衛及大病候節も數年□及孝養等之厚ヲ感嘆之餘り親類喜右衛門□□□遣□□□ヲ以相渡候由猶又重郎右衛門致相續□□□□とも壯年ニ付致後見先年奉公致候内貯置候衣類賣拂廻し金致往々田畠ニ而も買求度存念ニ而致丹精候處重郎右衛門儀種物ニ而兩三年相煩療養手ヲ尽候得共不相届相果打續物入等ニ而手當之金子も遣田畠買入候儀も相成兼候ニ付残金之分村役人江預ケ孫庄司若年ニ付本宅江引移萬事心労致世話居候處手跡迹も郷中ニ少ク今以遠近行状実儀慕い女子共数人被頼手習又ハ紡績之業ヲ教謝禮ヲ以暮方足リ合致候由猶又文化六已年中御帰國之砌御用金指上候者右村方ニ数多在之處重郎右衛門窮迫之砌力ニ不及先年ハ御用金大金差上御得共不行届儀ヲ残念ニ存筆子指南等ニ而屋敷内より多年貯置候金子指上切ニ相納旁心得□□之由申出候趣も在之件之通年若より貞操ヲ相守數年艱難心労致父母舅姑江孝養相尽候段奇特之至ニ候依之為褒美青銅被下置候条為取可申者也

右は水戸様御領内窪谷庄司祖母江紅葉村出張御役所郡奉行鈴木弥左衛門殿ヲ以文政七申年八月五日被下之候書付之写

事達公庭褒賜交下…を裏付けている。潮来では、どの様な褒賜を受けたか不明であった。

亦、これに關係して

**十二月大晦日**

(前文略)：夫より篠崎栄次殿宅江、罷こし、  
潮来妙信褒詞書付持參碑銘相頼

ともある。

篠崎栄次司直の碑銘撰文は記録になく、後、順養子・庄兵衛高包の女婿である宮本茶村による撰文の碑が建立された。

在任期間は、文政三年(一八二〇)六月十九日  
～文政十一年(一八二八)七月十五日。

鈴木弥左衛門：水戸藩紅葉組郡奉行。

この記載内容と「潮来妙信褒詞書付」を合わせると当時の庄兵衛家の経済状態を窺い知ることができる。

この調査は、一戸毎に持高・田畠山林の面積、家族の性別年齢、病気の有無、下男下女・馬・溜桶の有無、諸年貢指銭の高、拝借金額・居宅・灰屋・蔵の大きさ、年貢未進の有無などを記し、

享和二年(一八〇二)水戸藩は領内を十一郡に分け、有能な郡宰を配置して農村振興を計り、翌年にかけて、農村の生活力調査(俗に貧富調べ)を行つた。

『水戸市史 中巻(二)』第三節「農民の生活」第十四章「士民の生活・風俗」九二四頁に

寛政十一年己未五月七日格式近習番ニ進ミ、是年十一月二十九日郡奉行トナリ格元ノ如シ南郡ノ内十数ヶ村ヲ分テ支配シ、紅葉村ニ役所ヲ建テ此ニ住ス、高野文助世龍ト共ニ当役郷地ニ居住ノ始ナリ。享和元年辛酉十一月二十四日郡奉行本職ノ席トナル。

が書き留められており、「妙信」は「妙真」の誤記であり、浄国寺の石碑に記載されている『…

それに生活程度を「有福」「相応」「困窮」「極窮」の四段階に分けて記させた。

この四段階の基準は

有福：食料も足りて貯えや山林なども少々あり、拝借金は少ない者

相応：手一杯に暮し、肥料など購入できる者困窮：食料は一年分に少し不足するような者

極窮：食料は半年以上不足し、肥料にする刈敷もなく、拝借金も多くある者

となつていて、主として食料の有無、拝借金の多寡、施肥料の多寡に重点がおかれている。

この間、二十一年に亘り、荒廃・疲弊した郷村を勧農殖産政策と善政により立て直しを図り、見事よみがえらせた。

また、村民の教化のため、水戸藩郷校の先駆ともなった小川の「稽医館」や潮来の「延方郷校」の設立をし、下総国津宮村の儒者久保木清淵先生を招聘して子弟の教育に努めた。

そして、貫兵衛とは、飯高貫兵衛尚俊、窪谷庄兵衛信久の三男・征四郎のことである。伊能忠敬の養子となり、後、伊能忠敬の刎頸の友と云われた上総・栗生村の飯高惣兵衛尚寛の次女・千枝と婚姻し、飯高家を継承することになる。

#### 飯高貫兵衛尚俊

窪谷庄兵衛家、八代目庄兵衛信久の三男・征四郎。上総国山辺郡栗生村 飯高惣兵衛に行く。宝暦十一辛巳（一七六一）に生まれ、天保元庚寅（一八三〇）十二月六日歿、享年七十。

稟受院慈徳日萬

相模國東浦賀村 東耀山顕正寺 飯塚家墓地に葬る。

貫兵衛尚俊の長男・？兵衛尚義は、文化二年（一八一四）、東浦賀にて千鰯商いをはじめ、一三年に千鰯問屋の株を購入し、栗生・飯高家の浦賀出店である千鰯問屋「飯塚屋」を開業する。

後、飯塚屋ば次男・吉太郎ら兄弟が預かり経営し、貫兵衛は、後見のため東浦賀に移住する。

飯高惣兵衛尚寛については後日記述してみたい。

## 仙台藩蔵屋敷と潮来の繁栄

### （利根川の東遷）

徳川家康入府以前の利根川は江戸湾（東京湾）に流れ込んでいた。幕府は河川改修工事を行い、太平洋に流れ出ていた常陸川の上流に利根川を付け替えた。寛永十八年（一六四一年）に江戸川が通水した。その後、承応三年（一六五四年）に赤堀川（開削による）通水が成功し、利根川の水が赤堀川を流れて常陸川に入り銚子から太平洋に流れ出た。これにより江戸の水害対策と、江戸と関東・東北方面を結ぶ水運のネットワークが形成された。

### （東北方面からの物資輸送は）

房総半島を迂回して江戸湾に入る東回り海運コースがあつたが風待ちや技術的に難しく危険も多く初夏から土用までの三ヶ月間しか使えなかつた。それに代わるものとして水戸藩により開拓されたのが内川コースと呼ばれる潮来ルートである。

①那珂湊→涸沼→海老沢（陸送）→塔ヶ崎→

北浦→潮来→佐原→関宿→江戸

②那珂湊→涸沼→大貫（陸送）→鉢田→北浦→

潮来・・・江戸

これにより潮来は一層繁栄することになった。

（江戸時代人づくり風土記8茨城編）発行 社團法人農山漁文化協会企画編修による

仙台藩蔵屋敷は慶安二年（一六四九）に窪谷庄兵衛が世話人となつて、津軽藩蔵屋敷はそれよりやや遅れて宮本平太夫が世話人となつて建てられた。窪谷・宮本両家はそれぞれ仙台藩・津軽藩の御用商人として繁盛した。潮来の繁栄ぶりは水戸藩御用金にみることが出来る。元禄十三年（一七〇〇年）の出金者名簿によると、一位は三千両の

宮本平衛門、二位は千三百両窪谷庄兵衛、以下五位まで潮来勢が御用総額一万六千三百十八両の三分を占めている。

### （コースの変遷）

①洪水や浅間山の噴火等により本流が変わり瀬ができ大型船の航行が困難になつた。②外洋大型船が出現した。③航海技術が進歩した。①～③等の理由によりコースは変遷した。最終的に利根川の水運は鉄道の発達により衰退を余儀なくされ、トラック輸送の発達によりほぼ壊滅した。

### （伊能測量の背景－利根川の水運－）

当時、北浦と霞ヶ浦の接点である潮来は物流の中継拠点として栄え、仙台藩等の蔵屋敷が並び、人・物・情報が集まる場所となつていた。

忠敬の後妻ノブは仙台藩医桑原隆朝の娘である。伊能測量の責任者であつた堀田摂津守正敦は仙台藩主伊達宗村の八男である。忠敬は義父桑原隆朝を介して情報を得ていたと容易に推測できる。

伊能測量を可能にした経済力、桑原氏との出会い、忠敬の高橋至時への弟子入り等、すべてが利根川の水運による人脉・情報・経済力あつてのことである。「利根川の水運は伊能測量の隠れたバツクボーン」と云えないだろうか。（M）



昭和初期の潮来風情  
(上)さっぽ舟、(下)神宮橋  
撮影：飯塚義信 氏

## 伊能忠敬周辺の女性の手紙

### — 小島一仁先生古文書講座の史料から —

加藤時男

先年、伊能忠敬の研究者小島一仁先生が逝去されました。先生の学恩をうけ、古文書解読の御指導をいただいた一人として、御冥福をお祈りします。最近、当時のテキストを改めて読み直し、その史料の貴重さと先生の御指導のレベルに驚いております。そこで、当時の古文書勉強会の一端を紹介したいと思い、筆を執りました。

佐原の古文書研究会がいつ頃から始まったのかは、途中からしかも他地域から参加した私には判然としないが、私が参加したのは昭和五十年代であつた。当時、先生の住寺佐原の浄国寺を会場にして、伊能忠敬記念館の所蔵する諸史料をテキストに佐原の方々十人前後が参加させていた。当時のことを覚えている方がおられたら、是非紹介していただきたい。

当時、私は成東高校の社会科教師として勤務しており、小島先生には同業の大先輩としても指導をうけておりました。その頃、古文書を勉強はじめた私は、佐原で小島先生が古文書の勉強会を開いているとの情報を松尾町の北田昌一氏から得て、同僚の塚本庸先生、川島秀臣氏を誘い、早速に参加することになりました。

勉強会は、先生の指導により輪読会形式で忠敬周辺の人々の日記や手紙を読んで行きました。最初は地元の方々がスラスラ読んで行くので怖気づいたりしましたが、何とか我慢しているうちによ

うやくついて行けるようになり、勉強会のある土曜日は授業が終わるのを待ちかねながら、成東から佐原まで川島氏の運転で参加するのが楽しみとなっていました。

勉強会では伊能豊秋の日記をはじめ、忠敬の妻ミチ、娘イネの手紙など女性の手紙も多くとりあげられました。

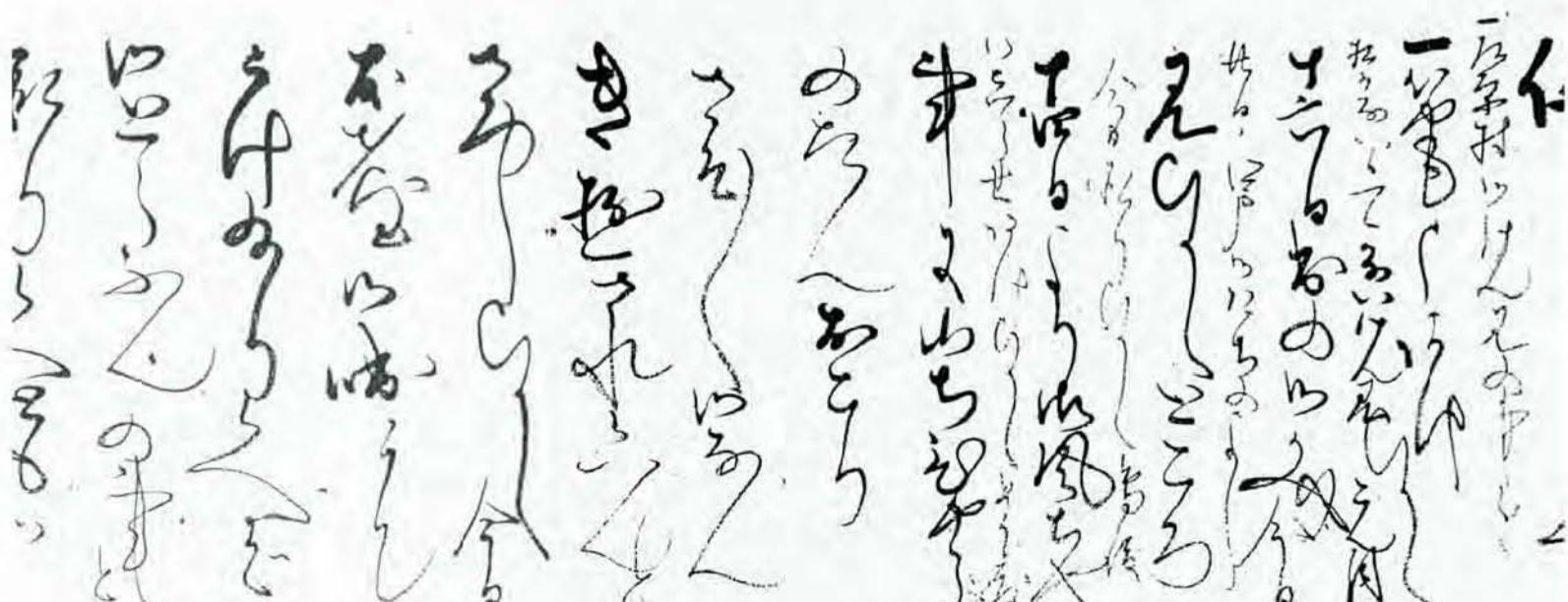
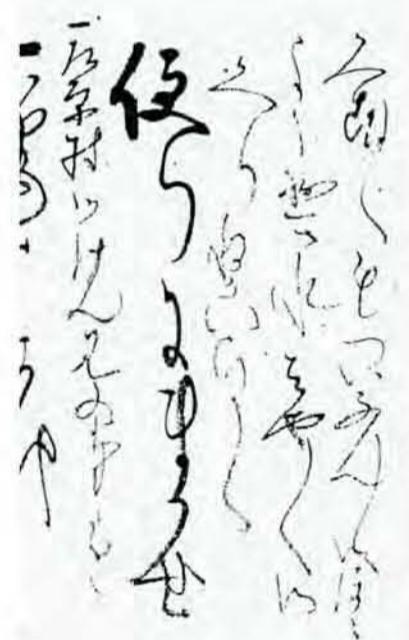
それらは現在では一括して国宝指定となっているのでしょうか、当時は小島先生が調査をされ、勉強会でもとりあげられました。

本誌『伊能忠敬研究』第八号（一九九六年六月）には、「伊能忠敬の妻・ミチの手紙」として小島先生により発見された十通のミチの手紙のことが紹介されている。そのうちの一通は影印も紹介している。

ここではその一部を当時のテキスト（コピー文書）により紹介。現在では簡単に披見出来ないであろうし、その筆蹟など雰囲気を味わって貰いたい。

#### ① 伊能ミチの手紙

一三郎右衛門（忠敬）あて



おとくのこど

しらし

のたんおこり

さそく御なん

き遊され候ハんと

さつしまいらせ候、今日

お才さま御咄ニテ

うけ給り候へば

御とうふんの事と

承り候へとも御

ようす見まいらせ候迄

申さす候まゝ

候よふにねかいまいらせ候

御はゝかりながら

あさぶ御しんそうさま

文ましによろしく

仰上らせ可被下候

なにとそくはよう

御かへりねかいまいらせ候

あらく御めもしの

ふしと申残しまいらせ候

めて度かくし

おつて申あけまいらせ候、中村おていとの  
事此間事さんいたしまいらせ候

母子共にそく才ニひたちまいらせ候  
御しらせまいらせ候、以上

いのふ

三郎右衛門さま

申給へ

ミちる

かへすくもついふんく御ほう  
よう遊されはやく御  
かへりねかいまいらせ候  
便りにまかせ

一左原村御けん見の事も

相かない候てないけん見まいらせ候、こん月

十六日出の御文今日

廿日江戸御たちのよし

見まいらせ候ところ

今日承りまいらせ候、鳥渡

十四日より御風ちや

御しらせあけまいらせ候、めて度以上

事に御ちひやう

② 伊能ミチの手紙  
——三郎右衛門（忠敬）あて——

一平の筆の如きは  
行はるに切立て  
わらうに大體に度て  
一弓の如きは  
行はるに切立て  
わらうに大體に度て

かへす／＼文右衛門もその外  
ミな／＼へも御はゝかりながら  
宜しく仰られ可被下候  
便りニまかせ文して  
一本しく忠四郎とのへの  
申あけまいらせ候、此間ハ  
家見の事長めんへしつねん  
天氣もよろしく  
いたしまいらせ候まゝ今日申  
御座候まゝ御機嫌  
上まいらせ候、なになりとも御  
よふ御つき遊ハし  
見やわせ御とゝのへ

候ハんと御嬉しく

可被下候、めて度以上

そんしまいらせ候、此方

ミな／＼きけんよく

おりまいらせ候まゝ

御あんし被下ましく候

此間しつねんいたし候

いねぢはんの半ゑり御とゞのへ被下可申候

一本もみの半ゑり壱つ

是ハはしきれニても宜しく候

一あさき小もん切京四郎分

此間のちりめんの身ころへつけ候袖に御座候

七尺八寸

右ぢはんの袖御座なく候

ゆへ申遣し候

一なかぬきそなり二足

鉄之介さしかさ壱本

右之しな御せわさま

おつて申あけまいらせ候

鉄之介うば子供当年

帶ときのよし承り候

御せわさまながら御とゞのへ可被下候

おなんとのきぬのもん付

すそもそもよくおもてはかり

参り候、又うばさと

よりハひよこしま壱反

参り候、むかうより

参り候もの申あけ

まいらせ候まゝこれニて

御かんへん被成御とゞのへ

可被下候

宿舎に着いて晴れていれば天測の用意をし、測

り食事は明るい内にとつて、星の出るのを待つ。

観測に二・三時間かかるから、天測班の作業終了

は九時から一〇時。酒を飲んでいる時間は実際に

なかつた。

いのふ 美ち

三郎右衛門さま

申給へ

## 伊能隊と飲酒

忠敬は酒蔵を業としていたが、伊能隊は禁酒だつた。酒飲みは隊員に採用しないと公言している。

宿舎に着いて晴れていれば天測の用意をし、測

る星の数は多ければ二・三十個だつた。風呂に入

り食事は明るい内にとつて、星の出るのを待つ。

観測に二・三時間かかるから、天測班の作業終了

は九時から一〇時。酒を飲んでいる時間は実際に

なかつた。

室内作業班はデータの整理。できれば当日分の測量下図まで仕上げたかつたがとても無理だつたらしい。天測の終わりが作業の終了。夜食が出て終わりという記述が多い。残業を前提に日課が組まれていた。雨降りは全員室内作業。

そして翌日は夜明けとともに、測量現場に着いて作業開始しなければならない。それが遅れると、一日中忠敬の機嫌が悪かつたという。

酒に関する記述は地元史料に結構現れる。禁酒というから出さなかつたら催促されたとか。下郎（従者）が寝酒を所望したので、金を受取り、有合わせの肴を出したという記事は良く出てくる。寝る前に一杯、というやつである。

しかし此の日課では息がつまりそうに思う。息抜きはないのか？ 测量日記をたどつてゆくと逗留という二泊する場所がある。大体一〇日に一度くらい、必ず賑やかな町である。山の中の逗留はない。これは休日だつたろう。

遊びにゆきたいものは行く。飲みたいものは飲む。恐らく次の逗留地を知られ、楽しみに声を掛け合つて、毎日頑張つたのではないか。（W）



# 忠敬談話室

山武歳時記（二）

一九十九里田中荒生で復活した！

江口俊子



その頃の農村では、子供達も農家の一員として、立派に役だっていたと思われます。昔から続いていた虫送りの行事も、東京オリンピック以降は各地で廃れてしましました。



竹と麦藁で作られた大小のやぐら。タイマツも並べられてる。(大塚さんが子供の頃作られたやぐらは8mだったそうです。)

子供達は麦藁や竹などを農家から譲り受け、自分でやぐらを組み、タイマツも作りました。虫送りの行事には大人は参加せず、男子中学生がリーダーとなっていました。子供としての交渉力、チームワーク、手仕事のわざなど、子供達の力が結集してこそ虫送りができたのでしょうか。

虫送りは、稲の穂が実り始めた頃、夜、タイマツを持った子供達が、田の畔道を回り、おびき寄せた虫を、麦藁で作ったやぐらに導いて火を付けて、害虫駆除した行事です。

子供の行事としての虫送りは廃れましたが、昔を懐かしみ、虫送りを復活されたのが、九十九里町田中荒生地区の大塚徳郎を中心とした田中交遊俱楽部です。平成二十年はその四回目でした。虫送りの当日、まず目にしたのが、十五メートルのやぐらです。どこか東南アジアの風景のようでした。田中荒生地区の小、中学生は六人でしたが、近在から多数の親子が参加していました。

夕方六時、「九十九里黒潮太鼓」が

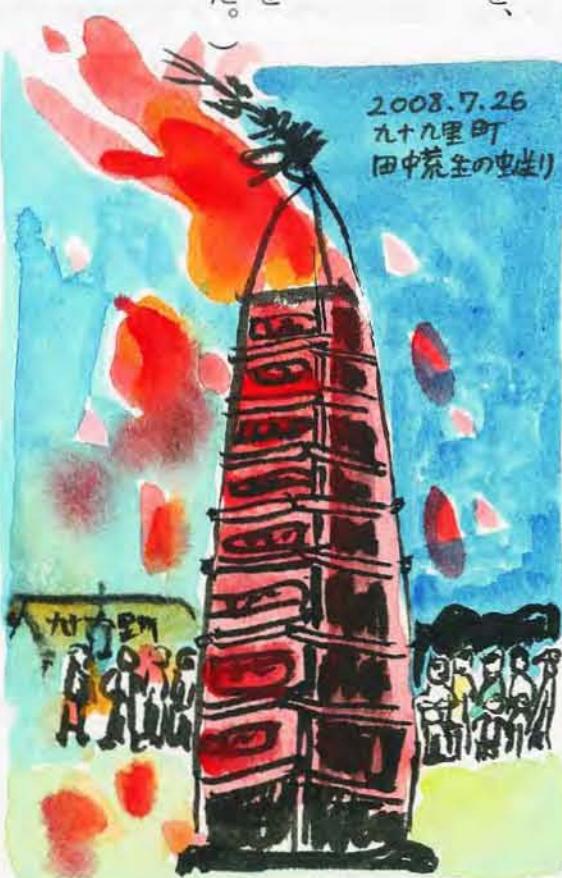
打ち鳴らされました。日が暮れると、タイマツを持った親子が虫送りの歌を、

なんむしょおくっど  
いねたち虫

さきんたたせて  
よろずのむしょおくっど

(なんの虫を送るのだ、稻につく虫を先にして、いろいろの虫を送るのだ。)と、歌いながらまわります。

タイマツの明かりを見て、大きな野外劇場にいるような気がしました。



1.5mのやぐらに火が付けられる。炎の動きが激しく、パチパチとはじける音が凄まじい。

皆が田の畔道を一周したのち、小さなやぐらから火がつけられ、最後に、十五メートルのやぐらに火が付きました。まるで赤い竜が天に舞い上がりつづいていました。ダイナミックな焰と、威勢よく、パチパチはじける音が圧巻でした。

（画は江口俊子氏）



麦藁で作られたツツコ。中に蒸パン、うどん、お菓子などを入れる。虫送り当日、地区の家では、子供達のためにツツコを竹に吊るして門口に置いた。



タイマツを持った親子が虫送りの歌を歌いながら田の畔を一周し、虫を誘い寄せる。

## 唐津藩の伊能図に関するメモ 渡辺一郎

唐津市で講演をすることになったので、唐津の伊能図にかかる史料を調べてみた。伊能忠敬記念館蔵の伊能忠敬先生日記五一冊のなかにある江戸滞在中の記録（我々は伊能忠敬江戸日記と称しているが）の中から拾つてみると次の通りである。

\*

文化六年四月一二日 唐津水野和泉守家士 勘定

吟味役 田口弥三郎 国図  
持来る。三十間堀七町目

永岡屋金兵衛案内。

唐津藩士の最初の訪問は、文化六年一月に帰着した四国測量の後だつた。町人の紹介だが、勘定吟味役といえば藩では要職であろう。

四月二一日 田口弥三郎地図持来る。  
どこの地図を持参したか分からぬが恐らく国

絵図ではないか。話の繋ぎと思われる。

五月一〇日 野元嘉三次（薩摩藩留守居  
佐役）、八つ後田口弥三  
郎来る。

七月 二日 田口弥三郎来る。  
八月 一日 田宿（ママ）弥三郎来る。  
午後より根来喜内（小普請  
支配）へ出立届にゆく。

文化十二年七月十三日 田口弥三郎より絵図帰る。  
今日より盆中御用休み。

約一年たつて地図が返される。貸したものは必ず模写がおこなわれたと考えていいだろう。

田口弥三郎来る。夜に入り  
て帰る。

\*

九州第一次測量の旅中に郷里へ出した、お稻の勘当赦免状とともにあつた手紙下書き。

\*

往来の頻度は結構多い。忠敬江戸日記には用向きを書かないのに分からぬが、付き合いはかなり濃密になつてゐる。

九州第一次測量には、文化六年八月二六日（陽曆一八〇八年十月）に出発した。濃密でなかつたら、九州測量出発前日に来て、夜までいる、などといふことは考えられない。

餞別を届け、最後の準備をしている忠敬を手伝いながら、雑談していたのではないか。

文化十一年五月二十五日 九州第二次測量から帰着  
文化十一年六月一八日 田口弥三郎来る。

文化十一年八月一四日 田口弥三郎来る。大画面  
5枚貸す。郁三郎、今日  
より来る。湯谷八十八来る。

ずつと記録は無くて、二回の九州測量が終わつて帰着すると、落ち着いた時期を見計らつて田口弥三郎が登場する。

大画面五枚を借り出しているが、北九州の地図はまだ仕上がつていない筈だから、どんな図かは分からぬが、伊能図であることは確かだろう。郁三郎は大村藩士、忠敬に入門していた。

ここでは、はつきりと、内々で唐津向けに地図を仕立てたと書かれている。戦災で焼かれなければどこかに残つてゐるのではなかろうか。

水野家の転封先も含め、田口弥三郎をキーワードに宝探しが面白いだろう。



## 安倍首相 成長戦略の記者会見で 伊能忠敬に触れる

編集部

二〇一三年四月一九日、安倍首相は今後の成長戦略について記者会見をおこなつたが、その際四月一九日にちなんで、伊能忠敬の蝦夷地への第一歩から語りかけられた。首相官邸のHPからダウントロードしたオフィシャル・テキストによつて紹介します。

二二三年前の今日、閏四月一九日、一人の男が、江戸を旅立ちました。日本最初の実測地図作成で、多くの方もご存じの伊能忠敬です。今日は、彼が、最初の地図を作るため北海道に向け出発した、記念すべき日であります。齢、五五歳。すでに隠居していた伊能忠敬は、「人生五〇年」と言われた時代に、むしろ五〇歳から天文学を学び、測量を始めました。

一七年かけて、歩いた距離は四万km。地球一周と同じ。まさに執念の測量でした。そうして完成した地図は、その正確さに幕末にやつてきた歐米の人々も驚いたほどであった、と言います。いかに困難と思える課題でも、あきらめない強い「意志」があれば、必ず乗り越えることができる。「行動」を起こすのに、「遅すぎる」ということはありません。伊能忠敬の偉業は、現代の私たちを勇気づけてくれます。

伊能忠敬が、一步一歩、歩きながら地図を作つていったように、一つひとつ、決断と実行を積み重ねていく他に、結果を出す道はありません。

遅れる復興には、復興庁が前面に出て、現場と直結する体制をつくりました。私自身、毎月、

根本大臣と被災地に足を運び、現場の声を聞き、復興の妨げとなつてゐる手続きを見直すなど、地味ですが、一つひとつ答えを出してきました。

（政権発足からほぼ四か月）遅れる復興、長引くデフレ、危機的な状況にある教育、傷ついた日本外交、主権への相次ぐ挑発。山積する国家的な危機に、政権発足からほぼ四か月経つた今も、日々格闘しています。しかし、政治に「これだけやれば解決する」というような近道はありません。

### あれ？弯架羅針がない？

富岡八幡宮の御存じの伊能忠敬像です。二月二九日に測量行のシンボル、羅針が落ちているのが、またま現場に行かれた星野代表、木谷幹事などによつて発見されました。経年の劣化にいたずらが加わったのでしょうか。

八幡宮様、製作者の酒井道久先生などと木谷幹事で連絡をとり合い、三月十八日（月）十時より、製作者の酒井先生のご指導のもと、池田美術さんによる修復作業が十四時ごろ無事に終了しました。二度と外れることがないよう、前より太くしつかりととりつけられたとのことです。（編集部）



あれ？弯架羅針がない



修復中です



立派に修復されました

## 箱田良助の子孫・榎本隆充さん

編集部



榎本隆充さん（撮影：伊能 洋）

になりましたか。

はないでしょう。

\*

A：箱田良助や伊能測量に関する記録や伝承は榎本家には全くありません。それを知ったのは昭和四三年（一九六八）に明治百年記念の行事がありました。その後、二〇〇九年に福山城博物館で福山の殿様だった旧華族の水野、阿部氏の子孫の方々と福山城訪問がキッカケで、地元の研究者の方々とお付き合いができる、詳しく知るようになりました。

Q：そうすると、伊能忠敬研究会で、伊能家にあつた箱田良助の入門誓約書をとりあげたのと時期的にあまり変わりませんね。研究会は一九九五年的創立です。

A：福山でお逢いしたと思います。

Q：菅波さんが会報二七号（二〇〇一）に掲載された記事に、箱田の婿入りの持参金は五〇両だったというのがありますがご存じですか。

A：知りません。伊能家の娘のお稲さん、婿入りのお金が足りないときは立て替えて欲しいと実家からお願いしている書状があることは承知しています。

Q：一方、持参金は千両だったのです？ という推測記事もありますが、それでは立て替えなどという額ではありませんので、まさかと思つていました。

Q：ご先祖の榎本武揚さんのことは何歳くらいの頃から聞かされましたか。

A：それはもう、物心ついたときからです。

Q：武揚さんの父の榎本円兵衛が元伊能測量隊員だったことは、いつ頃、どんなキッカケでお知り

Q：嫁入りの持参金というなら、五〇両はおかしくないですか。

A：福山でお逢いしたと思います。

Q：菅波さんが会報二七号（二〇〇一）に掲載された記事に、箱田の婿入りの持参金は五〇両だったというのがありますがご存じですか。

A：知りません。伊能家の娘のお稲さん、婿入りのお金が足りないときは立て替えて欲しいと実家からお願いしている書状があることは承知しています。

Q：一方、持参金は千両だったのです？ という推測記事もありますが、それでは立て替えなどという額ではありませんので、まさかと思つていました。

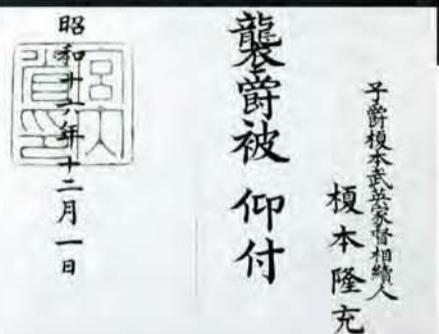


インタビューに応える榎本さん



歴代海軍大臣とその関係者との会に、榎本海軍卿の子孫として出席した学習院初等科の榎本子爵（集合写真の一部分）

右は襲爵の辞令



イーンの万博にも伊能図をもとに制作し出展された日本図があります。この地図は日本に戻つておらず、行方も分かっていません。ただ、この地図のイメージはわかつており伊能中図ではあります。（鈴木）

Q：伊能中図をフランスを持ってゆく接点が函館戦争位しか無いんです。目下、フランス中図の履歴は全く分かりません。品物は最上級の伊能図です。武揚に結び付くことを期待しています。（渡辺）

A：そうあるといいですね。

Q：榎本さんは旧子爵ですかね。随分若い時に襲爵されたと聞いていますが。

A：六歳のときです。学習院初等科一年でした。

理由は知りませんが、父が隠居をしたんです。六歳から榎本家の当主でした。面白い写真があります。海軍大臣関係の会合ですが、武揚は海軍卿でしたから、招かれて大臣の隣に座っています。

Q：旧華族子孫の会、霞山会は今でもありますか。実際に華族だった方はもう少ないのでないでしようか。

A：多分、私ぐらいのよう気がします。

Q：旧華族さんの役割は何だったのでしょうか。

A：それからお手当はあつたんですか。

A：華族は皇室の藩屏ということでした。したがって職業は陸海の軍人を勧められました。軍人は多かっただですね。しかし強制ではありませんから職業は自由でした。私は年齢的に兵役に関係ありませんでした。もっとも、華族として爵位を持つのは当主だけで、女性と当主以外の男性は関係ありません。

Q：旧大名やお公家さん出身の華族は、お金持つただつたと思いますが、その他の方もおります。お手当の方は？

A：決まつた手当はありません。ただ、爵位をいただいたとき、一時賜金がありました。子爵の場合で二万円賜わりました。明治の二万円ですから、今なら數十億でしょう。

このお金を運用すれば、余裕をもつて生活できることとした。

Q：華族さんって何家位あつたのでしょうか。

A：大名、公家で五百家、明治維新以降功績で爵位を賜つた家が二百家くらいです。武揚は功績華族です。

Q：榎本武揚さんは波乱万丈の人生だったとおもいますが、最後は相当リッチな方だつたわけですね。

A：海軍中将でロシア公使の時は、最高位の軍人の給料とロシア在外手当などで年収八千円、総理

大臣より高給だつたそうです（笑）

Q：それは凄い。

\*  
Q：ところで、榎本さんはずっと学習院ですか。  
A：はい。初等科、高等科、大学とずっと学習院です。

Q：以前は事業をやつておられたように伺っていますが、現在はどんなお仕事をなさつておられますか。

A：東京農大の客員教授ということで、特別講義などを担当し、また、学習院大学で生涯学習センターに講座を持っています。武藏野大学でも教えております。

その他、先祖が開陽丸乗組だつた者の子孫の会というのがありまして会長をしております。

Q：長時間、ありがとうございました。箱田、榎本、フランス中図に関係のありそうなお話を出ました際は、ぜひお知らせください。どんな、断片的なお話でも結構です。

A：函館で一緒に籠城したフランス軍人のキヤップのブリュネ大尉の子孫という方が二五年くらい前に日本に見えました。

ブリュネさんは、帰国後出世してフランス陸軍ナンバー3になつてゐるのですが、画才があつたと見えて、日本のスケッチ（細密画）を沢山描いているのです。それを持つて見えたのです。

Q：それは情報です。渡辺の仮説が当たつていれば、フランス伊能中図をブリュネは必ず見ていました。日記か伝承が残つていればいいですね。軍事顧問団長のシャノワン大尉の記録でも同じです。（渡辺）

A：今年、ブリュネの子孫に会うかも知れないの覚えておきます。

## 榎本武揚文書に出会う

渡辺一郎

榎本隆充さんには入会早々ながら、東京農大の大沢学長を御紹介いただいた。その際、大沢学長から最近入手したという榎本武揚自筆の証明書を見せていただいた。

榎本さんも此の種の文書は御存じないとのことだつたし、内容も珍しかったので、大沢学長の御了解をいただき、別項の原文を伊藤栄子さんに解説していただき、若干の解説を試みます。

(解説文)

一方、榎本は年表によれば、このとき外務大臣を務めており、多忙ななかで、寸暇を割いて一農学生のフィールドワークに証明書を書いていることになる。

学生が何人いたか分からぬが、大変面倒見の良い人だつたような気がしてならない。文書は瑞穂町の旧家にあつたというから、先祖に天野喜之助さんという方がいて、この証明書をいただいたのではなかろうか。

第拾三号 証明書

割印

右ハ本農學生ニシテ、今般農事為取調各地巡回可致

ニ付テハ、御地へ罷出候ハ、宜御教示  
被下度致希望候

東京市麹町区飯田河岸

私立育英黌管理長

明治二十五年 七月十五日 子爵 榎本武揚 印

お知らせ

TBSのBBS番組に 榎本隆充さん登場

六月二二日放映のTBSのBBS歴史番組「黒田清隆と榎本武揚」に榎本さんが登場します。

二二時から二三時の一時間番組で、録画を終わっています。高橋英樹が司会で、武揚側が隆充さん、清隆側は竜門さんだそうです。

この番組は親しい歴史上の有名人同志のバトルという触れ込みですが、清隆と武揚は始めは戦いますが、人材を惜しんで、黒田清隆が助命に奔走します。子孫の隆充さんがどう

武揚（伊能隊員・箱田良助の次男）を語るかお楽しみください。

この筆法でゆくと、高橋至時と伊能忠敬もいいかも知れません。

東京都麹町区飯田河岸  
私立育英黌管理長

明治二十五年七月十五日  
子爵 榎本武揚 印

「東京農大ものがたり・秋岡伸彦」から私立育英黌について調べると、東京・飯田橋の地に、東京農大の萌芽といふべき「私立育英黌」が誕生したのは、明治二十四年（1891）で、設立母体は榎本武揚が会長を務める徳川育英会だったという。維新後、困窮した旧幕臣の子弟教育が狙いだつた。徳川育英会で、幹事長として榎本を補佐したのは剣術の達人伊庭想太郎である。

育英黌で榎本は管理長（理事長）に就き、黌長を務めたのは、戊辰戦争では幕府砲兵隊を率いて戦い、砲術家として知られた永持明徳だった。

証明書にある明治二十五年には、育英黌は大塚

## 会報68号の「先触れ」の写しに

誤記を発見より

伊藤栄子

新潟県立文書館で保管されていた富所家の文書のなかで、伊能測量隊の「先触れ」の写しの誤記を発見という山浦幸代氏の紹介された史料を読み、ひとと申し上げます。

私はいま忠敬先生の測量日誌の校訂を他の方々と共に手伝わせて頂いておりましたが、この測量日誌を書かれた忠敬先生でさえも、ごく稀に誤記や脱字はあります。あの長い旅の忙しい中、克明に書かれた厖大な記録ですから。ましてや村方文書等の中に間違いがあつても、特別珍しい事ではありません。

ひと区切りの文の中に誤字があつた時、全体の文意を損なう程でなく、又本来の字が容易に分かる場合は、読む方も理解していたのではないでしょうか。右筆が記したような公的書類はさすがに誤りを見ません

が、一般の人々の手による文書の中には少々の写し違いはよくある事で、紙は貴重品でしたから別紙に書き直すことはありませんでした。

この史料の中で、測量が渾量とあり、写し違いの字の方が難しい字というのも面白いです。古文書を解説していく上で誤字を発見するには、ある程度の力が必要で、昔の文書の誤字を見つけるのも勉強の一方法でしょう。

が決まりました。

解説文

天文方 高橋作左衛門弟子

伊勢勘解由マツ

五

右ハ測量御用の為め、北国筋へ指し遣わされ候ニ付き、陸奥國三馬屋より西の方海辺ニ添い、出羽、越後國浦々罷り通り、淵量いたし候間、指し聞えこれ無き様致すべき旨、堀田摶津守仰せ聞かれ候。右ハ御領分も御座候ニ付き、此段其の筋の御役人中へ御通達これ有る様ニ存じ候

享和二戌年六月

右御書付御渡し成され候写し相廻し候間、  
御順達成さるべく候 以上

\*成らるべく、成さるべく…どちらも使いますが、私は今の会話に近い方を用います。

## 「伊能図大全」の刊行決定

伊能忠敬に関するHPの運営や、伊能測量日記DVDの頒布などをおこなっているイノペディアでは、かねてから、完全復元伊能図・中図・小図をすべて収載した「伊能図大全」の制作を検討していました。このほど河出書房新社から、次の要領で刊行されることが決りました。

書名	伊能図大全(仮称)
発売開始	2013年6月
刊行構成	A4版全7冊、化粧箱入り。
第一巻	大図 東北・北海道
第二巻	大図 関東・甲信越・東海
第三巻	大図 近畿・中国・四国
第四巻	大図 九州・九州沿海図
第五巻	伊能中図・小図
第六巻	概説と図解
第七巻	地名索引

第一～第五巻 全カラー上製本。  
第六・第七巻 モノ並製。  
一二〇、〇〇〇円  
一、〇〇〇部。発売特価も予定。  
河出書房新社

定価

発行部数

発行者

監修者

編著者

資料提供

渡辺一郎	イノペディア
中央委員会	完全復元伊能図全国巡回フロア展

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第六回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第五次測量】その二(和歌山城下・岡山城下)自 文化二年八月十日 至 文化二年十二月二九日

【表中赤色文字は改訂増補部分】

		宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
文化二年八月 (1805)		十 (9・2)		和歌山城外久保町		同	和歌山市	本陣庄屋嘉市 中屋九右衛門		百三十八		紀ノ川口より止宿まで測る 暦局行用状相認、出す。			
十一 (9・3)	中食 本脇浦	十二 (9・4)	同	加太浦		同	和歌山市	一向宗西派光源寺	恒星測定	百三十八					
十三 (9・5)	中食 小嶋浦	十四 (9・6)	同	谷川浦		同	岬町	庄屋戸口市左衛門	沖ノ嶋、地ノ嶋、二嶋を測る	百三十八					
十五 (9・7)		十六 (9・8)	尾崎村	岸和田城下北ノ浜		同	阪南町	西本願寺加ヶ所御房	大雨逗留、恒星測定	百三十八					
十七 (9・9)	中食 高石南村	十八 (9・10)	堺町	岸和田市		同	阪南町	春木屋吉蔵	恒星測定	百三十七					
同	同 春日出新田	同	同	同	同	同	同	同	恒星測定	百三十五					
同	同 春日出南二丁目	同	同	同	同	同	同	同	恒星測定	百三十五					
同	同 大阪市此花区	同	同	同	同	同	同	同	恒星測定	百三十五					
同	会所(泉州食次郎右衛門下屋敷)								住吉宮參詣	百三十五					
逗留測(千嶋新田より恩貴新田)	逗留測(尼ヶ崎領初嶋より恩貴新田)	淨春寺の麻田剛立の碑へ参詣。	坂部貞兵衛奉行所へ町内測量の届に出る。 暦局へ大坂着状を出す。	間清市郎へ書状を遣す。 間清市郎來る。	恒星測定	百三十五									
逗留測(千嶋新田より恩貴新田)	逗留測(長町より京橋片町、野田町外迄測る。)	測量の為に忠敬、高橋、坂部、平山、同道にて間氏宅へ行				百三十五									
百三十五	百三十五					百三十五									



十七	(9)	木ノ浜村	同	守山市	東本願寺末光寺	恒星測定
十八	(10)	吉川村	同	野洲市	百姓藤四郎 清三郎	百姓藤四郎 清三郎
十九	(11)	野村	同	近江八幡市	西本願寺末西福寺	平山・佐藤は龜画図を成
二十	(12)	八幡町	同	近江八幡市	馬淵屋金右衛門	山上にて恒星測定
二十一	(13)	長命寺	同	近江八幡市	長命寺観音御供所	沖ノ嶋を測。平山は長命山上に登眺望図を成。
二十二	(14)	同	同	近江八幡市	忠敬當村に來て推歩を成	恒星測定
二十三	(15)	丸山村	同	近江八幡市	忠敬残居で推歩を成	恒星測定
二十四	(16)	八幡町	同	近江八幡市	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
二十五	(17)	常楽寺村	同	安土町	忠敬外二名、荒神山に登て南端北端両所にて山嶋を測。忠敬外二名、乘船多景嶋へ渡り測る	恒星測定
二十六	(18)	伊庭村	同	東近江市	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
二十七	(19)	薩摩村	同	彦根市	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
二十八	(20)	同	同	彦根市	忠敬外二名、乘船多景嶋へ渡り測る	恒星測定
二十九	(21)	同	同	西本願寺末善照寺	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
三十	(22)	滋賀県彦根市	同	西本願寺末妙樂寺	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
一	(10.22)	甘呂村	辻伝左衛門	忠敬薩摩村に至推算す	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
二	(23)	彦根城下伝馬町	彦根城下伝馬町	彦根候より、忠敬・高橋・金三百疋宛、坂部・金二百疋目録被贈下。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
三	(24)	同	同	彦根市	忠敬外二名、乗船多景嶋へ渡り測る	恒星測定
四	(25)	米原宿	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
五	(26)	長浜町	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
六	(27)	長浜町	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
七	(28)	中食	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
同	八木浜村	長浜町北伊部町灰屋	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
同	同	長浜市	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
同	同	長浜市	彦根市	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
同	市右衛門	宇野孫助	年寄吉川三左衛門	彦根候、鷹野に小休のよし。	忠敬薩摩村に至推算す	恒星測定
恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定
竹生嶋に渡り周囲を測	恒星測定。間五郎兵衛方へ書状を遣す。	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定
百二十一	百二十一	百二十一	百二十一	百二十一	百二十一	百二十一



十九	八	七	六	五	四	三	二	一	（11.21）	蒲田村字高洲	中食 神崎川通佃村	（22）	尼ヶ崎城下別所町	（1805）	文化二年十月
（-30）	（-29）	（-28）	（-27）	（-26）	（-25）	（-24）	（-23）	同	西宮町	大石村	同	同	同	大阪府大阪市淀川区 西三国2丁目「一」	
同	明石大倉谷駅	西須磨村	兵庫町新在家町	同 神戸市灘区	同 西宮市	同 神戸市灘区	同 西宮市	同 尼崎市	会所儀助	渡辺市三郎	兵庫県尼崎市	同	京都府宇治市	同 大津市	忠敬外五名、止宿より直に池ノ尾村に至る。恒星測定
同	同 明石市	同 神戸市須磨区	同 神戸市兵庫区	同 綱屋長右衛門	松屋伝助 魚屋善兵衛	脇本陣 小幡坪屋源兵衛	恒星測定	恒星	菊紙六十帖被送。一同受納	尼ヶ崎候より忠敬へ小菊紙三十帖被贈。差添三人へ小	百三十五	百三十五	同 京都市伏見区	同 宇治市	宇治川に添て宇治に至る。川辺難所景色よし、両岸悉
同	広瀬利兵衛	西本願寺末源光寺	上野山福祥寺（須磨寺）立寄靈宝を一見す。小坂病氣。	恒星測定	忠敬外四名、摩那山に登て山嶋を測。それより広嚴寺に立寄楠子の書を一見し生田宮へ参詣し、布引滝も一覽。楠公の碑の前にて山々を測る。小坂病氣。恒星	高橋外三名、摩那山に登て山嶋を測る。平山、小坂、吉平病氣。恒星測定	恒星測定	恒星	大曇風逗留	大曇風逗留	百三十七	百三十七	同 大阪府摂津市	同 丹波屋仁兵衛	高山岩石なり。
恒星測定	推算地図。逗留	恒星測定	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	恒星	雨天逗留
															百三十三
	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十七	百三十三



文化二年十一月 (1805)

中食 (12.21)

兵庫県赤穂市

長安与三右衛門

織方村大崎

藤兵衛

百姓伊助

恒星測定

(22)

日生村

福浦村

同赤穂市

幸吉政七 沢五郎

恒星測定

(23)

(大多府嶋)

岡山県備前市

本家与左衛門

恒星測定

(24)

日生村

同備前市

藤兵衛

恒星測定

(25)

難田村

同備前市

百姓三郎兵衛 伊助

恒星測定

(26)

片上駅

同備前市

升屋利平治

恒星測定

(27)

虫明村

同瀬戸内市

三手分。クチナシ嶋を測る

恒星測定

(28)

同

同

三手分。曾嶋、鴻嶋、大多府嶋、頭嶋を測る

恒星測定

(29)

尻海村

同瀬戸内市

三手分測。恒星測定

恒星測定

(30)

牛窓湊東町

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(31)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(27)

虫明村

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(28)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(29)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(30)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(31)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(32)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(33)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(34)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(35)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(36)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(37)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(38)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(39)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(40)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(41)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(42)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(43)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(44)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(45)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(46)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(47)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(48)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(49)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(50)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(51)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(52)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(53)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(54)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(55)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(56)

同

同瀬戸内市

坂部病氣。三手分。長嶋を半周程測る暦局用状致着

恒星測定

(57)

同

同瀬戸内市



二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十
(一) 16)	(一) 15)	(一) 14)	(一) 13)	(一) 12)	(一) 11)	(一) 10)	(一) 9)	(一) 8)	岡山城下下之町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
岡山城下下之町	同	同	同	同	同	同	同	同	岡山城下下之町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
岡山県岡山市北区 表町二丁目	同	同	同	同	同	同	同	同	岡山県岡山市北区 表町二丁目	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
脇本陣福岡屋吉郎平衛	同	同	同	同	同	同	同	同	脇本陣福岡屋吉郎平衛	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	午中太陽測定と恒星測定	積雪三寸斗、近年の大雪 間清市郎へ用状を出す	午中太陽測定	午中太陽測定と恒星測定	間清市郎へ宿送用状を出す	忠敬痰発引籠	暦局行書状認夜分渡				午中太陽測定	午中太陽測定と恒星測定							

# 各地のニュース

## 伊能忠敬墓前祭行われる

去る平成二五年五月十七日、伊能家菩提寺、牧野山「觀福寺」に於いて、仮称「忠敬墓前祭斎行を考える会」による墓前祭が行われました。

これまで墓前祭は伊能忠敬翁の命日にあたる新暦五月十七日に香取市が取り行つてきましたが、

理由あつて取りやめとなつていました。

「忠敬翁は地元佐原のみならず日本を代表する偉人であり、その功績を讃え後世に伝えて行くことは私達の役目ではないか」との想いから山村増代氏が発起人となり賛同者を得て「忠敬墓前祭斎行を考える会」が発足し、今回の墓前祭となりました。

墓前祭は伊能家墓所忠敬墓石前において読経で

始まり出席者全員が焼香して終了しました。

その後、本堂大広間において、本会理事で香取市議の伊能敏雄氏の進行で説明会がありました。「忠敬墓前祭斎行を考える会」の発起人の山村増代氏より、「五年後の二〇一八年には忠敬没後二百年の節目を迎えます。

大震災以降途絶えていた墓前祭の再開を機に伊能忠敬先生の顕彰を関係諸団体と共に市民運動としてソフト・ハード両面から考え実行して行きたく思います」との挨拶がありました。

伊能忠敬N H K 大河ドラマ化推進協議会会长の木内志郎氏から聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏と徳川記念財団理



事長の徳川恒孝氏を名誉会長にお願いしたこと等が報告されました。

参加者 山村増代氏・地元県議・香取市長・木内志郎氏・木内信次氏・伊能敏雄氏他地元有力者及び関係者、本会香取支部長香取喜良氏他皆様、約五十名でした。(M)

## 大谷大学博物館特別展「伊能忠敬の日本圖」

### 会期

2013年6月11日(火)～8月5日(月)

※日、月休館、7月21日(日)、8月5日(月)は開館

開館時間 10時～17時 (入館は閉館時間30分前まで)

※金曜日は19時まで開館延長

### 会場

大谷大学博物館

京都市北区小山上総町 大谷大学内

響流館1階 電話 (075-411-8483)

※市営地下鉄烏丸線「北大路」

(京都駅から15分) 6番出口すぐ

市バス「北大路バスターミナル」

「北大路駅前」「下総町」下車

観覧料 一般・大学生 500円 小中高生 無料

### 主な展示

国宝「伊能忠敬関係資料」(伊能忠敬記念館蔵)  
「天日本沿海輿地全図」中図(イブ・ペレイ氏旧蔵・日本写真印刷藏)ほか

①講演 日時 6月22日(土) 14時

会場 大谷大学講堂

講師 渡辺一郎氏(伊能忠敬研究会・名誉代表)

「フランス伊能中図の発見から日本里帰

りまで」  
②講題 日時 7月20日(土) 14時

会場 大谷大学尋源館2F尋源講堂(予定)

講師 酒井一輔氏(伊能忠敬記念館・学芸員)

「時代と伊能忠敬」(仮題)

## 大沼 晃さん(藤沢市)より

3月30日(土曜日)産経新聞の「忘れ難き偉人伝」に伊能忠敬の記事が掲載になりました。上・中(4月6日)・下(4月13日)の三週連続記事ゆえ、揃いましたらお送りいたします。取り急ぎお知らせ申し上げます。

(編集部)連載終了後、3回分の切り抜きを送つていただきました。産経新聞オピニオン欄に掲載されました。筆者は将口泰浩さん、タイトルは「忘れ難き偉人伝」「伊能忠敬」



連載(上)「人生二山」を生きた男

連載(中)「人生二山」を生きた男

連載(下)「人生二山」を生きた男

### 教育

忘れ難き  
偉人伝

伊能忠敬

# 新入会員自己紹介



榎本隆充さん(東京都)

此度入会させて頂きました榎本でございます。

第七次伊能測量隊から参加し、

後に内弟子筆頭となりました箱田良助「後の榎本円兵衛」の玄孫であり、円兵衛の次男、榎本武揚の曾孫に当たります。

武揚は戊辰戦争の折、箱館五稜郭に於いて、幕府海軍副総裁として最後まで薩・長と戦った事で知られています。又、あまり知られておりませんが、外交官等を歴任しております。政治家、電気学会、工業科学会、気象学会、地学協会等、の会長もしております。科学技術者としての側面も持っております。これは正に、伊能図作成に心血を注いだ父親、箱田良助の素質を受け継いだものと思っております。

世界に誇る伊能図の研究は、諸先輩の御努力により、かなり解明されているものと拝察しておりますが、今回、フランスに有つた伊能中岡に、武揚が関与していた可能性がある事をお聞きし、八月にパリにまいりますので、ブリュネの子孫に会い、その辺を確かめたいと思ております。

なお、私の紹介はインタビュー記事をご参照下さい。

今後の、当会の発展と研究に少しでもお役に立てることがあれば、幸甚と思っております。宜しくお願い申し上げます。

山田 洋さん(唐津市)

渡辺先生の講演に感銘を受けて入会いたしました。

## 会員便り

—会費納入・

総会返信などより

市川美津夫さん(長野県須坂市)

(北国街道 福島宿在住)

平成二五年三月二六日「東北信

(信濃の国東北部の意味です)」の

街道を訪ねる会のメンバー15人で伊能公が第三次測量で歩いた

北国街道田中宿と海野宿付近約十

二キロを歩きました。

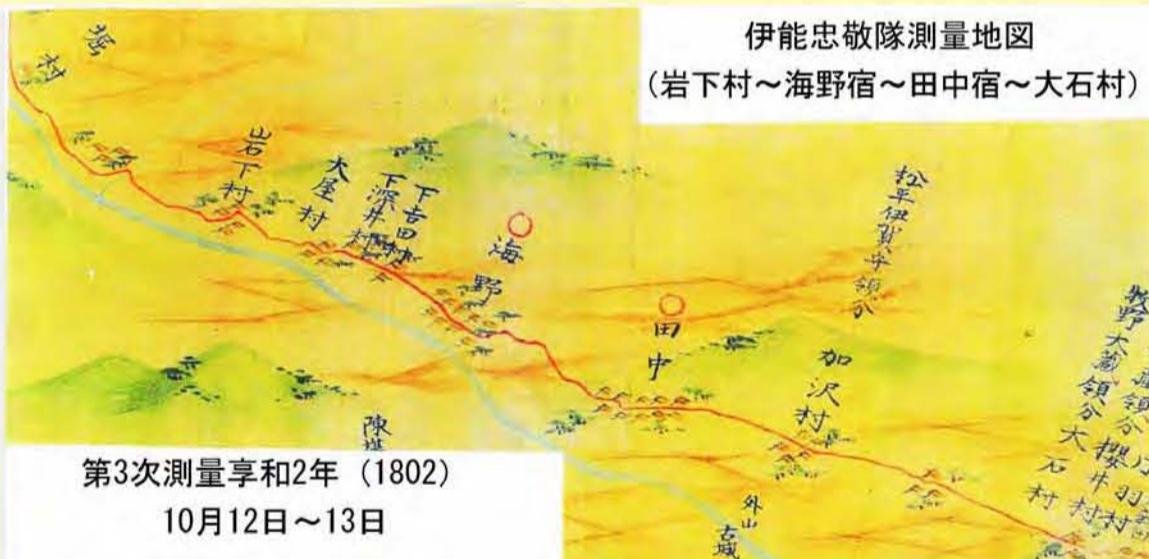
その際、右図のような伊能公の測量図を作り、往時を偲びながら歩きました。

また海野宿では現地在住のガイド案内していただきとても好評でした。

この会は昨年発足し、まず中山

道と北国街道の追分の「追分宿」より「善光寺宿」を目指して歩いています。

伊能忠敬隊測量地図  
(岩下村～海野宿～田中宿～大石村)



御教授をよろしくお願ひします。

伊能二三代さん(札幌市)

地域活動支援センターで所長として、仕事をさせて頂いています。大河ドラマに決まりますように、いつも北国よりお祈りしております。

河西 浩さん(甲府市)

今年もよろしくお願ひします。

川上 清さん(水戸市)

25年3月16日(土)～17日

日(日)第2回水戸観梅ツーデウォークを開催、快晴下偕楽園梅花満開にて参加480名の皆さまに喜んでいただきました。



「東北信の街道を訪ねる会」の皆さん



**馬場良平さん（武雄市）**

『伊能忠敬測量隊肥前国測量から

200年！』測量隊の足跡をたどり歩く会開催中。6月9日の研究会総会とダブリ、東京に行けないのが残念です。

**岡部孝子さん（東京都足立区）**

今年度は行事に参加したいです。

**新沢義博さん（さいたま市）**

5月より（さいたま市に）引っ越

します。  
**高木崇世芝さん（札幌市）**

拙著を紹介して頂き感謝申し上げ

**前田健之助さん（匝瑳市）**

体が弱つてきました。

**山浦佐智代さん（三条市）**

お世話になります。

**高宮宏さん（東金市）**

第65号の伊能楯雄様の「伊能三郎右衛門家墓地」史跡巡り、意義深い内容に感動いたしました。第65

号の海保英之様の「海保千神家」の解説を案内に現地を訪ね、大きな石塔の数々に敬意を覚えた後だけに、伊能、平山、海保家の墓石が語る縁

の深さをはじめて知ることができました。感謝いたします。

**塚本倫正さん（成田市）**

（佐原）の木内信次さん、大河ドラマに向けて大活躍です。

編集の素晴らしさ、皆さんに敬服しています。

**矢能彰さん（さいたま市）**

眼と両ひざを痛め、日々苦難。

県内の公民館や淑徳大学市民講座で忠敬さんのシニアからの生き方の卓話をしています。

**大西道一さん（神戸市）**

伊能参考図高砂の記事遅れています。申しわけありません。

**堀野正勝さん（土浦市）**

伊能図フロア展最終コーナーを目指し頑張っています。

**西川治さん（多摩市）**

富士学会十周年記念事業、富士山頂を各地から観測した伊能先生を偲びました（2012）。

この4年余、榎本武揚の手紙を解読して頂いています。武揚の父親の生涯については、さらに研究したいものです。

**神保弘之さん（千葉県横芝光町）**

25年3月末日をもって公務員を退職しました。

本号から活字が大きくなり思わずすと読みこんでしまいました。

史料解説に安藤さんのお名前にし

ばしおしのび申しました。三郎右衛門の墓地もしばし偲ばせていました。

**齋藤仁さん（東村山市）**

健康と体力づくりに努めて居ります。会報の充実ぶり、ご苦労様です。

何もお手伝いできず申し訳ありません。

（加賀尾さんは「伊能忠敬笹山領探索の会」会長をつとめておられます）

**山本公之さん（小平市）**

忠敬が用いた望遠鏡の製作者岩橋善兵衛の大坂貝塚の善兵衛ランドに行つてきました。2月22日のこと、その内に報告いたします。

**石川清一さん（福岡市）**

もうしばらく公民館の仕事をしますので、時間をそちらにとられそうです。よろしく。

**平川定美さん（佐世保市）**

伊能碑建立の候補地を探しています。

**江口俊子さん（山武市）**

故伊能陽子さん、安藤由紀子さんには、私が絵を続けて描くことに、とても励されました。今、お二人のこと、懐かしく思っております。

**神保弘之さん（千葉県横芝光町）**

25年3月末日をもって公務員を退職しました。

元気で働いています。

上田勝俊さん（鳥取市）

新しい仕事について苦労しています。

**加賀尾宏一さん（篠山市）**

平成26年（2014）3月24日

記による笹山領内測量道の200年になりますので、弊会として記念事業を策定中であります。

（加賀尾さんは「伊能忠敬笹山領探

索の会」会長をつとめておられます）

（城野幹丈さん（嬉野市））

いつもお世話さまです。何も協力

できなくて申し訳ありません。今後ともよろしくお願ひします。

**白根貞夫さん（横須賀市）**

間もなく九十路となる所、妻なく一人で暮らし、日々の糧づくりに追われています。幼年期から鉄道が好きだったので、先般日本鉄道漫談の講演をしました。諸兄姉の御健勝を祈ります。

**村上昭三さん（船橋市）**

その後も体調が余り良くなく、会合に出席出来なく、残念に思っています。会報は楽しく読ませてもらっています。不

**友田修司さん（東京都杉並区）**

先刻、私の従兄の縁戚を通じて政府に伊能忠敬の資料を届け偉人伝を伝えておきました。

提案 何か全国駆伝リレーなどはどうですか。やはり地方の皆さまが参加出来ることをイベントとして企画・開催して下さい。

**川尻達子さん（香取市）**

3月末に香取市役所を定年退職いたしましたが、今年2月の東総歩こう会（銚子市・旭市・香取市・匝瑳市・香取郡・山武郡の地域）の総会において会長に就任いたしました。毎日歩こう会関係の書類作成に奮闘しております。

**塚本倫正さん（成田市）**

機関誌の発刊を楽しみにしています。

高校生、PTAで講演のさいは、いつも忠敬の生き方についてはなしています。事務局のみなさんのご労苦に感謝しています。

**原田照男さん（神戸市）**

最近右膝の蝶番を取替えました。順調に回復しています。

**石川清一さん（福岡市）**

この4月1日から福岡市公民館長2期目（2年間）に入つたところです。年間3万人近くの利用があり、意外にいそがしく、九州支部の活動にも時間がとれず申し訳なく思つて

います。

**秋間 実さん（逗子市）**

85歳 まだ生きのびています 諸兄姉との再会を楽しみにでかけます。

**安川義巳さん（旭川市）**

春に小雪が舞つて困惑しています。佐原はじめ各地の震災復興を願っています。総会が盛会でありますように。

**久保木恒雄（柏市）**

壮健也。

**松田昭二さん（京丹後市）**

老齢により欠席いたします。研究会の発展をお祈りします。

**三木敏明さん（姫路市）**

お世話になりありがとうございます。

**木谷道宣さん（小平市）**

伊能図フロア展の来年の展開について下交渉を始めております。ぜひ47都道府県での開催を！

**岡部孝子さん（足立区）**

ご連絡ありがとうございます。当

**山浦佐智代さん（三条市）**

久しぶりに参加させていただきま

**山本公之さん（小平市）**

在京の有志に限らないが、どこかで例会（題名のない懇談の集まり）

が欲しい。お互いの会員の顔が見えないので、思い付きですが希望しま

ます。

**神保弘之さん（横芝光町）**

3月末をもちまして、公務員を定年退職しました。これからは、自由な時間を楽しみたいと思っています。

**清水靖夫さん（新宿区）**

お世話さまです。宜しく願上げま

しで元気になります。盛会をお祈りしております。

**宮地 滋さん（伊万里市）**

伊能測量隊200年、平成24年9月15日～10月8日伊万里市にて伊能展、11月1日～11月30日有田町にて伊能展開催。

**城野幹丈さん（嬉野市）**

伊能忠敬研究会に入会できることを幸と思っております。

**伊藤栄子さん（練馬区）**

いつもお世話さまです。今年は沖縄会議と重なってしまい、申

訳ありません。会の益々の繁栄を祈念致します。

先日、渡辺先生と武雄（佐賀県）市で、お会い出来ました。皆さんにもよろしくお伝え下さい。

**伊藤栄子さん（練馬区）**

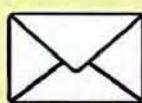
脊椎手術の為入院しますので失礼いたします。御盛会を祈っております。

**石井友夫さん（横浜市）**

よろしくお願ひいたします。

**垣見壯一さん（新潟市）**

素晴らしい会誌楽しみです。ご努力に敬意を表します。



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿

の場合は連載として分割してください」ともあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープ

ロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mm（350ppi）のカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからぬ場合はレジ（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子

ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式の

フォーマットでもかまいません。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものをお郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておください。概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入し下さい。メモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 [inohken\\_kaishi@koalanet.ne.jp](mailto:inohken_kaishi@koalanet.ne.jp)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持つて許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地  
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会  
電話・FAX 03-3460-0752

事務局メール [inohken@ae.auone-net.jp](mailto:inohken@ae.auone-net.jp)  
郵便振替口座 001HO-K-OH1-HAK-10

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

### 編集後記

◇本号は少し薄めですが、掲載された記事はかなり多彩で濃い内容となりました。地図作りの業績もさることながら、人間忠敬の生き方が少しずつ明らかになってきて、これまで以上に親しみをもつて忠敬先生とその時代に思いました。巡回を巡らすことができるようになってきたのではないか。◇さて、今まで以上に親しみをもつて忠敬先生とその時代に思いました。巡回もまた、編集部のMさんに大奮闘していくためには、元気の良い（若い）スタッフがあと二人ぐらほしいところです。どうしたか手を挙げていただけるとありがたがります。いいほどのことです。作業はインターネットを通じて行いますので離れておいてください。

◇さて、今まで以上に親しみをもつて忠敬先生とその時代に思いました。巡回もまた、編集部のMさんに大奮闘していくためには、元気の良い（若い）スタッフがあと二人ぐらほしいところです。どうしたか手を挙げていただけるとありがたがります。いいほどのことです。作業はインターネットを通じて行いますので離れておいてください。